

平安京左京四条四坊三町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇六―二八

平安京左京四条四坊三町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京四条四坊三町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびマンション建設に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

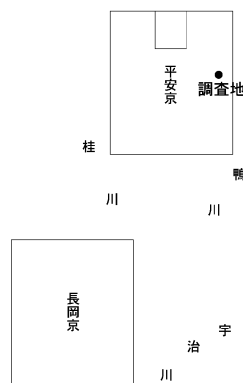
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京左京四條四坊三町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区蛸薬師通東洞院東入泉正寺町 320・西魚屋町 612-1・612-2 |
| 3 委 託 者 | オウミ住宅株式会社 代表取締役 奥本秀樹 |
| 4 調査期間 | 2006年10月20日～2007年2月14日 |
| 5 調査面積 | 441 m ² |
| 6 調査担当者 | 伊藤 潔 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「三条大橋」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | 伊藤 潔 |
| 17 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	4
(1) 第1面の遺構	4
(2) 第2面の遺構	7
(3) 第3面の遺構	11
(4) 第4面の遺構	13
4. 遺 物	14
(1) 土器類	14
(2) 瓦 類	24
(3) 石製品	26
5. ま と め	27

図 版 目 次

図版1	遺構	1 第1面全景(北から)
		2 SK58(西から)
		3 SK305(西から)
図版2	遺構	1 SE458(北から)
		2 SE538(南西から)
		3 北壁断面
図版3	遺構	1 第2面全景(北から)
		2 第3面全景(北から)
図版4	遺構	1 第4面全景(北から)
		2 SH700全景(北から)
		3 SH700遺物出土状況(南から)
		4 SD679断面(南から)
図版5	遺物	SD313・SK381・SK492出土土器
図版6	遺物	SK441・SK306・SK592・SK639出土土器
図版7	遺物	SH700他出土弥生土器
図版8	遺物	出土軒瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図および周辺の調査（1：4,000）	1
図2	四行八門および調査区配置図（1；1,500）	2
図3	調査前全景（南から）	3
図4	作業風景（北から）	3
図5	北壁断面図（1：60）	5
図6	第1・2面遺構平面図（1：200）	6
図7	SE458・538・533、SK202 実測図（1：40）	8
図8	SB 2 実測図（1：50）	9
図9	第3・4面遺構平面図（1：200）	10
図10	SK492 実測図（1：20）	11
図11	SH700 実測図（1：20）	12
図12	SH676・SD679 実測図（1：80）	13
図13	SK58 出土土器実測図1（1：4）	15
図14	SK58 出土土器実測図2（1：4）	16
図15	SK311 出土土器実測図（1：4）	17
図16	SD313、SK381、SK246・382、SK429・464・465、 SK384・401・434・486 出土土器実測図（1：4）	19
図17	SK492・441・306・592・639 出土土器実測図（1：4）	21
図18	SH700・SD679 出土土器実測図（1：4）	23
図19	その他の出土土器実測図（1：4）	24
図20	瓦拓影・実測図（1：4）	25
図21	石帯実測図（1：2）	26
図22	町割り図（1：2,000）	27

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	14

平安京左京四条四坊三町跡

1. 調査経過

京都市中京区蛸薬師東洞院東入泉正寺町・西魚屋町で、(仮称)東洞院 PROJECT が計画され、京都市文化財保護課が試掘調査を実施したところ、平安時代後期から鎌倉時代の柱穴・土壌や室町時代後期の堀と考えられる遺構を良好な状態で検出した。そのため、京都市文化財保護課の指導により(財)京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け発掘調査を行うこととなった。

調査は京都市文化財保護課の指導により、東西 11 m、南北 40 m の調査区を設定し、江戸時代前・中期の整地層上面まで重機掘削し、これ以下を人力で掘削して行った。

調査の節目ごとに京都市文化財保護課の視察を受け、その指導の下に調査を進めた。

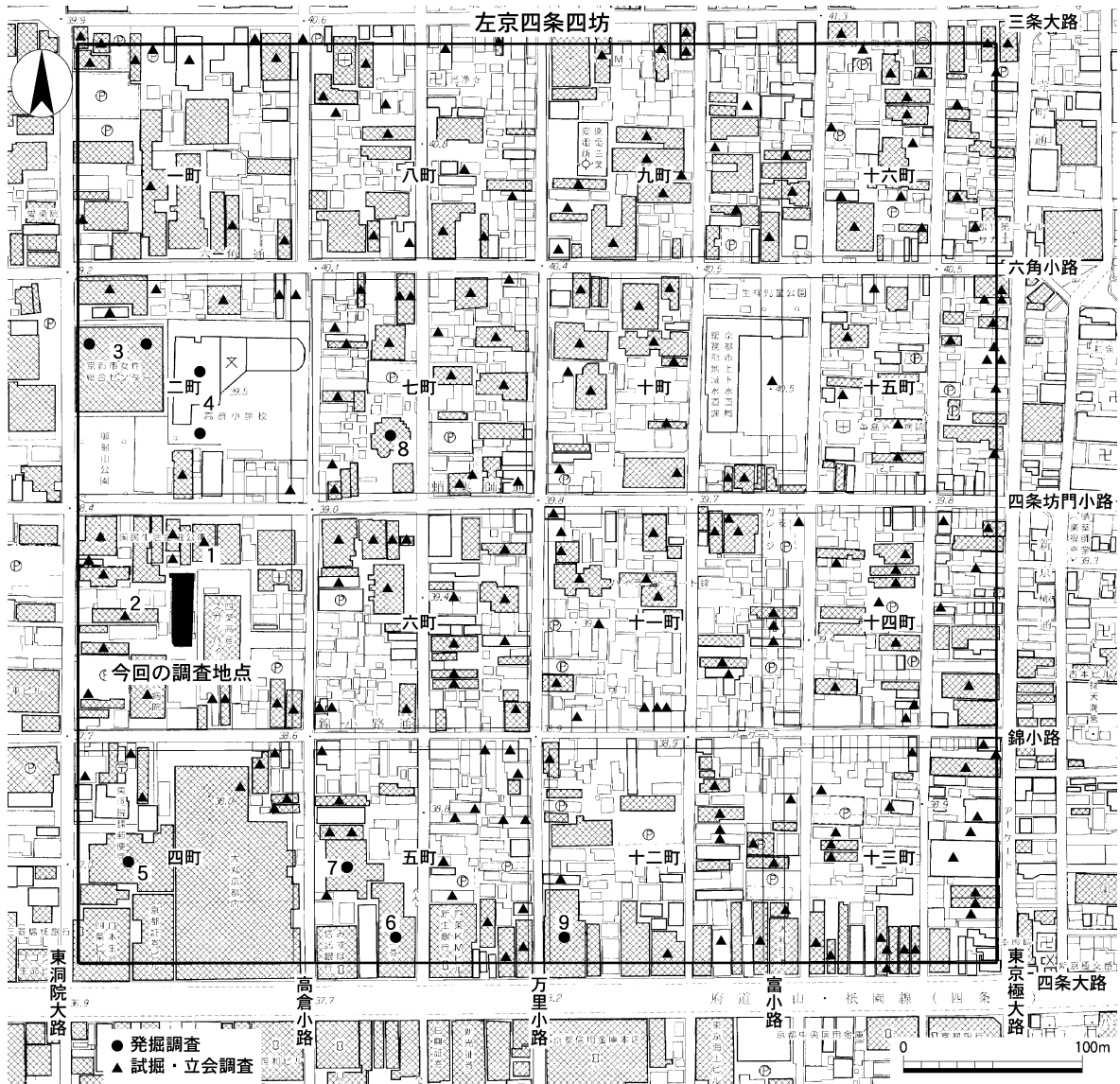


図1 調査位置図および周辺の調査(1:4,000)

2. 位置と環境

調査地は、平安京の条坊では北側を四條坊門小路、西側を東洞院大路、南側を錦小路、東側を高倉小路に四方を画された左京四條四坊三町の中央部にあたる。また、1町内を区分する「四行八門制」では、三町内の「西二・三行北三・四・五門」の六戸主に該当する。同町に関連する平安時代の文献資料は不明確であり、特定の邸宅や諸施設の存在は推定されていない。しかし平安時代中期から後期になると隣接地には、藤原宗道邸・藤原重道邸（二町）、四條東洞院内裏（四町）、藤原実行邸・待賢門院御所（八町）などの貴族の邸宅があいついで営まれていたことが記録に残っている。中世には、下京の町の一角を占め、以降も各時代を通じて都市域の中心地となっている。また、当地の周辺には弥生時代から古墳時代の烏丸綾小路遺跡や、縄文時代から古墳時代の烏丸御池遺跡がある。

現在の左京四條四坊の地は、京都市内でも有数のオフィス・繁華街の一画であり、開発行為も非常に多い地域の一つである。再開発が多くを占めているため、発掘調査の件数はそれほど多くない。しかし、試掘・立会調査の件数は膨大な件数に達している。試掘・立会調査では、明確な遺構の検出は少ないが、平安時代後期から江戸時代に至る遺物包含層を各所で検出している。

当三町における発掘調査例はなく、試掘調査・立会調査が14件ある。(図1-1)の調査では飛鳥時代の流路西肩口が検出されている。(図1-2)の調査では、地表下0.5～0.2mで室町時代から江戸時代の遺物包含層を4層検出している。

二町内では2件の発掘調査が行われている。(図1-3)の調査では平安時代中・後期の区画溝・

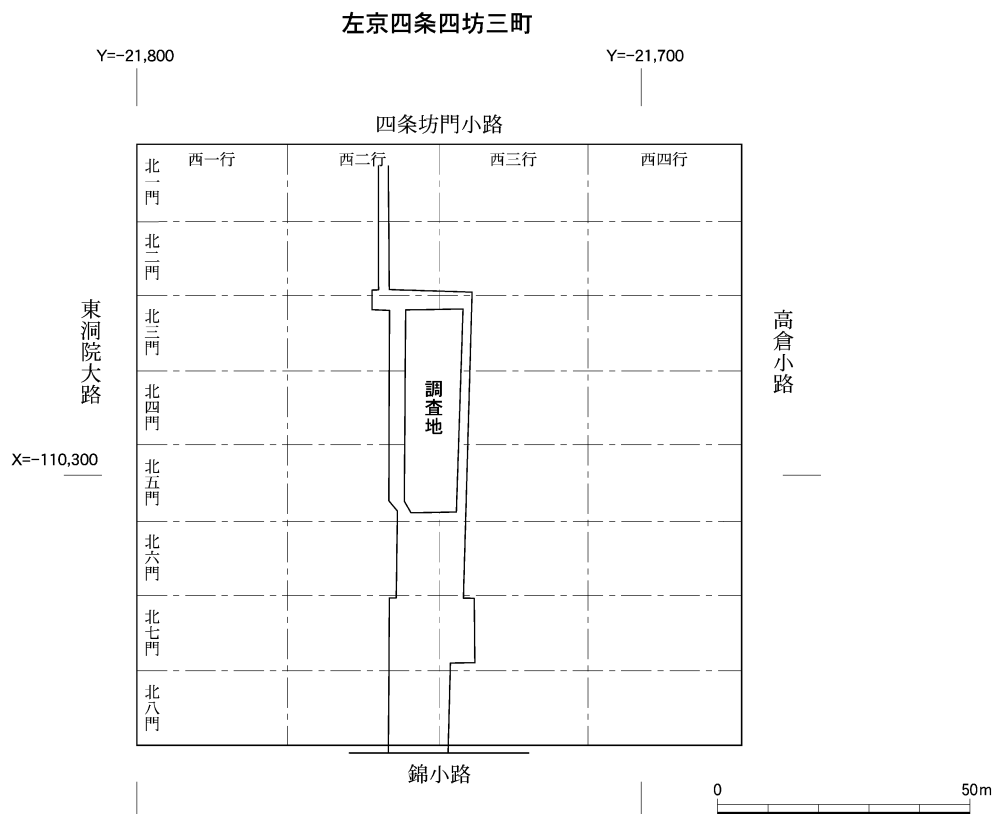


図2 四行八門および調査区配置図 (1 : 1,500)



図3 調査前全景（南から）



図4 作業風景（北から）

井戸・土壙や江戸時代前期の堀が検出されている。(図1-4)の調査では平安時代後期から鎌倉時代の溝・井戸などが検出されている。

四町内(図1-5)の調査では平安時代の遺構は残存しなかったが、弥生時代の溝・中世の井戸・土壙墓および江戸時代初期の鏡鑄造工房が検出された。

五町内では2件の発掘調査が行われている。(図1-6)の調査では平安時代前期から中期の土壙・柱穴・整地層などが検出され、前期から中期初の土器類の一括資料が出土した。(図1-7)の調査では平安時代前期から中期の遺構密度は高くはないが、平安時代後期から鎌倉時代になると土壙・井戸・柱穴などが多数検出されている。唐三彩の陶枕、長沙銅官窯系の褐釉水注片が平安時代後期の土壙・整地層から出土した。

七町内の調査(図1-8)では、平安時代前期の溝・土壙、中期の整地層、後期の溝・土壙などが検出されている。地鎮具と推定される土器を納めた地鎮土壙が確認されている。下層では幅11m以上、深さ1.5mの北東から南東へ流れる流路があり、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器類が多数出土した。

十二町内(図1-9)の調査では、平安時代中期後半から後期の四条大路北側溝や建物、井戸などが検出されている。

3. 遺 構

調査地は南北に長いため、層序は場所によって異なる。壁面における土層観察は、西壁・南壁・東壁では室町時代以降の遺構が地山より深く掘り込まれており、それ以前の土層は北壁の一部で確認できるだけである。

基本層序は、幕末以降の盛土（0.5～0.7 m）、黒褐色泥砂（図5-6・8層〈以下同〉：0.2～0.35 m）、黒褐色砂泥・黄灰色砂泥（9・19～22層：0.15～0.5 m）、暗灰黄色砂泥（39層：0.1 m）、オリーブ褐色砂泥（46層：0.1 m）、褐色砂泥（地山）となる。

黒褐色砂泥・黄灰色砂泥の上面を第1面、暗灰黄色砂泥の上面を第2面、オリーブ褐色砂泥の上面を第3面、褐色砂泥の上面を第4面とした。第1面は江戸時代前期から中期、第2面は室町時代、第3面は平安時代から鎌倉時代、第4面は弥生時代の遺構が主体をなす。

第1面で検出した遺構には、堀立柱建物・井戸・溝・土壇・ゴミ捨て穴などがある。各遺構の埋土は、焼土・炭を含むものが多い。第2面では、堀・石組み井戸・溝・土壇・土取り穴などを検出した。第3面では、土壇・溝などを検出したが少数である。第4面では、弥生時代の竪穴住居・流路・土壇を検出した。

以下、各面の主な遺構について述べる。

（1）第1面の遺構（図6、図版1-1）

SB1 2間×3間の東西棟の建物。掘形に焼土・炭を含む。江戸時代後期。

SK58（図版1-2）調査区南東隅で検出した南北3m、東西4m以上、深さ2.5mの大型のゴミ捨て穴である。数回にわたり掘り返されているが、下層からは17世紀後半代の遺物が多量に出土する。

SK305（図版1-3）長辺1.35m、短辺0.9m、深さ0.25mで周囲を挙大の石がめぐる。上部をSK223で削平されている。埋土は黒褐色砂泥で土師器皿・焼締陶器播鉢・染付などが出土している。出土した遺物からみて、遺構の年代は16世紀末～17世紀初である。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代	井戸、土壇、ゴミ捨て穴（SK58・150・181）、建物（SB1）など	
室町時代	堀（SD313）、石組み井戸（SK458・533・538）、石組み土壇（SK202）、土壇、溝、建物（SB2）、柵列（SA1）、土取り穴など	
鎌倉時代	土壇	
平安時代	土壇	
弥生時代	竪穴住居、流路、土壇	

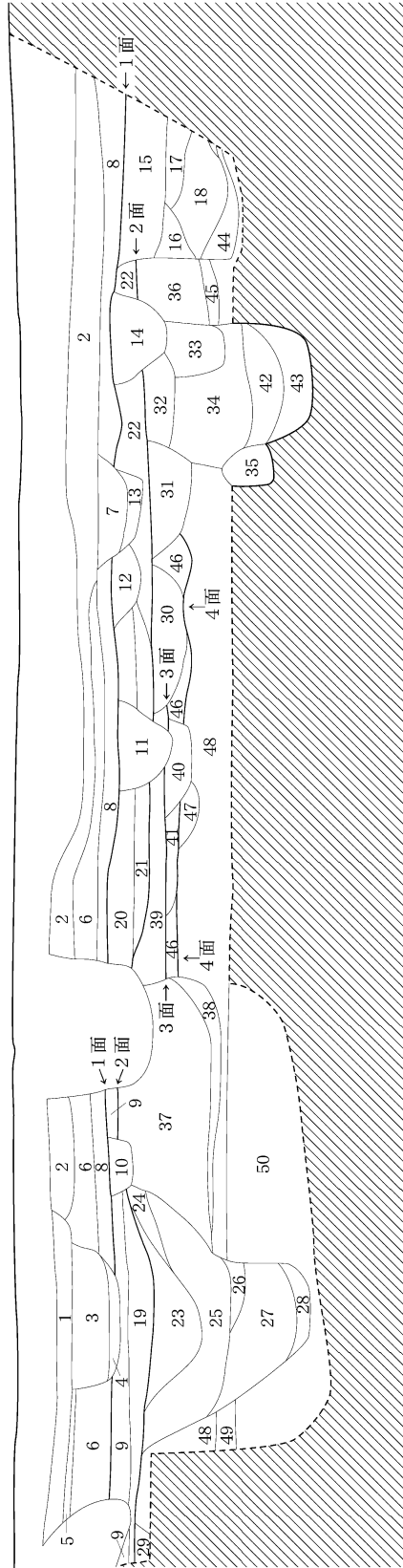
Y=-21,748

Y=-21,744

Y=-21,740

Y=-21,736

H=38.50m



- | | | |
|----|-------------------|----------------------------|
| 1 | 7.5Y3/2 黒褐色泥砂 | 小礫、炭混 |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色泥砂 | φ1~10cm礫少量混 |
| 3 | 7.5Y3/2 黒褐色泥砂 | |
| 4 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | |
| 5 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土混 |
| 6 | 7.5Y3/2 黒褐色泥砂 | |
| 7 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | |
| 8 | 10YR2/3 黒褐色泥砂 | 土器少量混 |
| 9 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ1~10cm礫多量混 (SD 3) |
| 10 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 小礫少量、炭微量混 |
| 11 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | |
| 12 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | |
| 13 | 10YR1.7/1 黒色粘質土 | 炭多量混 |
| 14 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | 炭、土師片少量、φ1~8cm礫中量混 |
| 15 | 10YR4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、瓦片少量、漆喰混、土師片多量、φ1~33cm礫混 |
| 16 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、土師片微量混 |
| 17 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | 炭微量、土師片、小礫少量混 |
| 18 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 炭、土師片、小礫少量混 |
| 19 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 土師片少量混 |
| 20 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 土師片やや多量混 |
| 21 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 混径1~7cm礫少量、炭、土師片少量混 |
| 22 | 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 | 炭、土師片少量、φ1~15cm礫混 |
| 23 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 炭混 |
| 24 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | |
| 25 | 10YR2/3 黒褐色砂泥 | |
| 26 | 10YR3/2 黒褐色粘質土 | 粘土ブロック少量混 |
| 27 | 10YR2/3 黒褐色砂泥 | 粘質 |
| 28 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | |
| 29 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | (SK800) |
| 30 | 10YR4/1~5/1 褐灰色砂泥 | 炭、土師片微量混 (SK510) |
| 31 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、土師片、φ1~16cm礫少量混 |
| 32 | 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 | 炭少量、土師片多量混 |
| 33 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、土師片少量、須恵器混 |
| 34 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 | 炭、土師片少量、糠縮混 |
| 35 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | 炭、土師片中量混 |
| 36 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | 炭少量、土師片中量混 |
| 37 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 混径1~5cm礫、炭、土師片中量混 |
| 38 | 10YR2/3 黒褐色砂泥 | 炭、土師片多量混 |
| 39 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、土師片少量混 |
| 40 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭、土師片少量混 |
| 41 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | 炭、土師片混 (SK642) |
| 42 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 炭、土師片少量混 |
| 43 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | 炭、土師片少量混 |
| 44 | 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 | 炭、土師片微量混 (SK615) |
| 45 | 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 | 炭、土師片微量混 (SK655下層) |
| 46 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 | 炭、土師片微量混 (SK617) |
| 47 | 10YR4/4 褐色砂泥 | (SK688) |
| 48 | 10YR4/4 褐色砂泥 | |
| 49 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 | |
| 50 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 | (地山) |

図5 北壁断面図 (1 : 60)

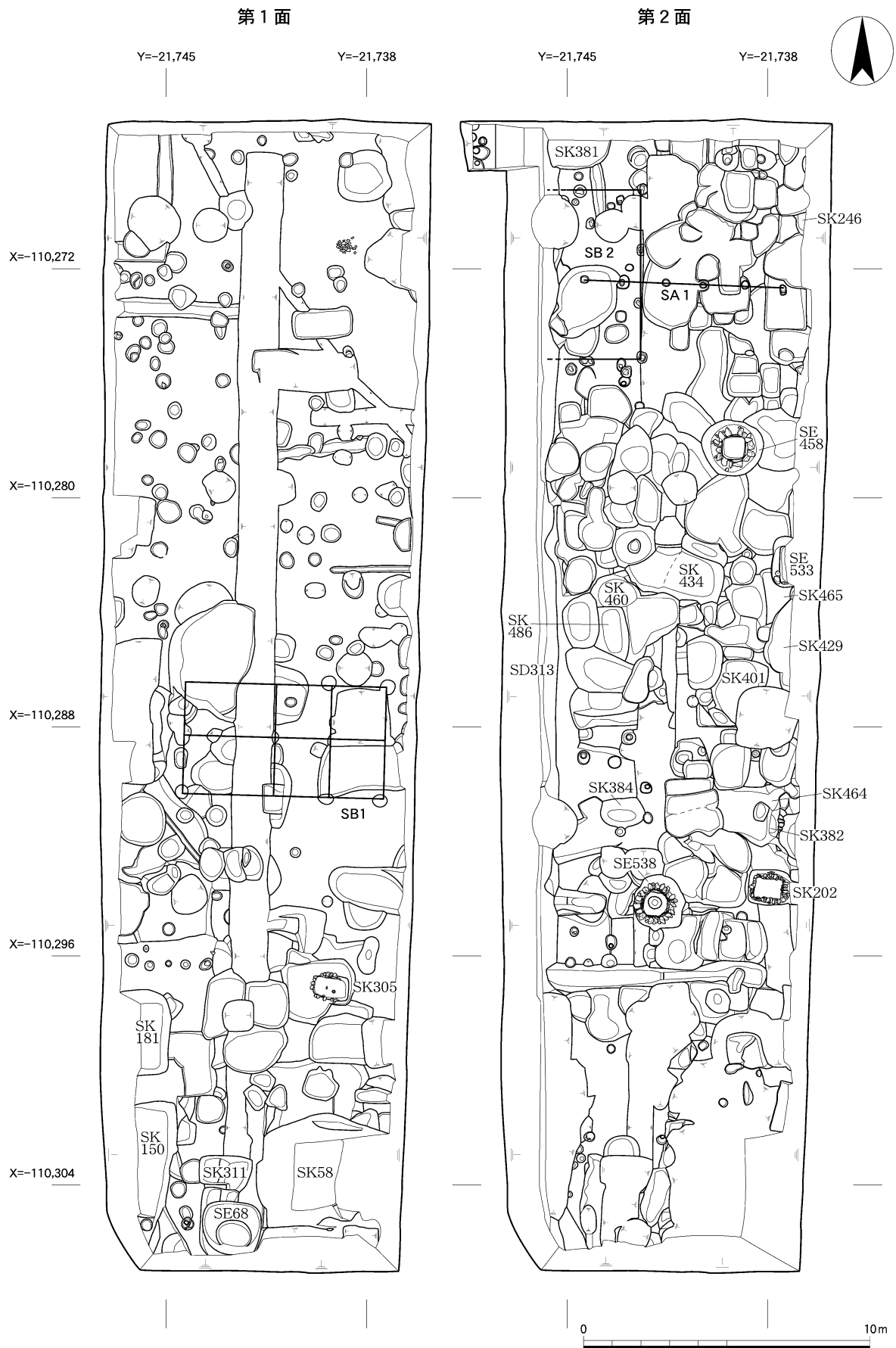


图6 第1・2面遺構平面図 (1:200)

SK311 長さ2 m以上、幅1.45 m、深さ0.7～0.85 mの長方形の遺構である。埋土は3層に分層でき、1・2層は炭を多量に含む。1層より土師器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器・輸入染付などが出土している。出土した遺物からみて、遺構の年代は16世紀末である。

(2) 第2面の遺構(図6、図版3-1)

第2面で検出した遺構には、堀・井戸・土壇などがあるが、大半は調査地中央部で検出した15世紀～16世紀前葉に属する土取り穴である。

SD313 調査区西端で現地地表下1.2 mで40 mにわたって検出した。上辺2.4 m、下辺0.6 m、深さ1.6 mの断面逆台形を呈する南北方向の堀である。1町の東西の中心より、わずかに西寄りに位置する。埋土はおおまかに6層(23～28層)に分層できる。遺物は少量しか出土していないが、16世紀前半～中頃に開削され、16世紀末頃に埋まったとみられる。

SE458(図7、図版2-1) 北東部で検出した石組み井戸である。掘形の平面は径1.9 mの円形で、深さは検出面から2.25 mである。そのほぼ中央に内径0.9 mの石組みがなされているが、ほとんどが抜き取られており、最下部が残存し、大きさ20～30 cmの河原石を小口面を内側に向けて積んでいる。石組み下部には方形に組み合せた木枠が設けられている。木枠の内法は各辺0.8 m、高さ0.45 mである。底面の標高は34.75 mである。埋土は上層が灰黄褐色砂泥、井筒内は黄褐色砂礫である。井筒内からは15世紀代の土師器小片が出土しているだけであるが、上層からは16世紀末～17世紀初の土器類が出土している。

SE533(図7) 東壁ぎわで検出した石組み井戸である。上部を15世紀末～16世紀前葉の遺構で壊されている。最下段の石組みの一部が残存する。14世紀代の土師器小片が数点出土した。

SE538(図7、図版2-2) 南部で検出した石組み井戸である。掘形の平面は径1.9 mの円形で、その中の西に偏して内径約1 mの石組みがなされ、12段残存している。深さは検出面から2.5 mである。石組みに用いられている石は比較的大きな河原石で、小口面を内側に向けるように丁寧に積み上げられている。石組みの下部には方形に組み合せた木枠が設けられている。木枠の内法は各辺0.8 m、高さ0.2 mである。さらに下部に径0.45 m、高さ0.15 mの曲物が据えられていた痕跡が認められた。底面の標高は34.80 mである。井筒内からは14世紀代の土師器小片が少量出土した。

SK202(図7) 南東部で検出した方形石組み土壇である。掘形は東西1.5 m、南北1.25 m、深さ0.75 mで内法は東西1 m、南北0.7 mの石組みがなされている。石組みに用いられている石は人頭大前後の河原石で、小口面を内側に向けるように積み重ねられている。底面は中央部が少しくぼんでいる。埋土はにぶい黄褐色泥砂、掘形は暗褐色砂泥(炭混)である。

SK381 北西端で検出した遺構で、東西2.2 m以上、南北0.9 m以上、深さ0.6 mを測り、西側を堀(SD313)に切られている。埋土は2層(37・38層)に分層でき、下層の黒褐色砂泥(炭多混)から、15世紀前半～中頃の土師器皿が多量に出土した。

SB 2(図8) 北西部で検出した、南北3間(6 m)、東西1間(2 m)以上の掘立柱建物で、

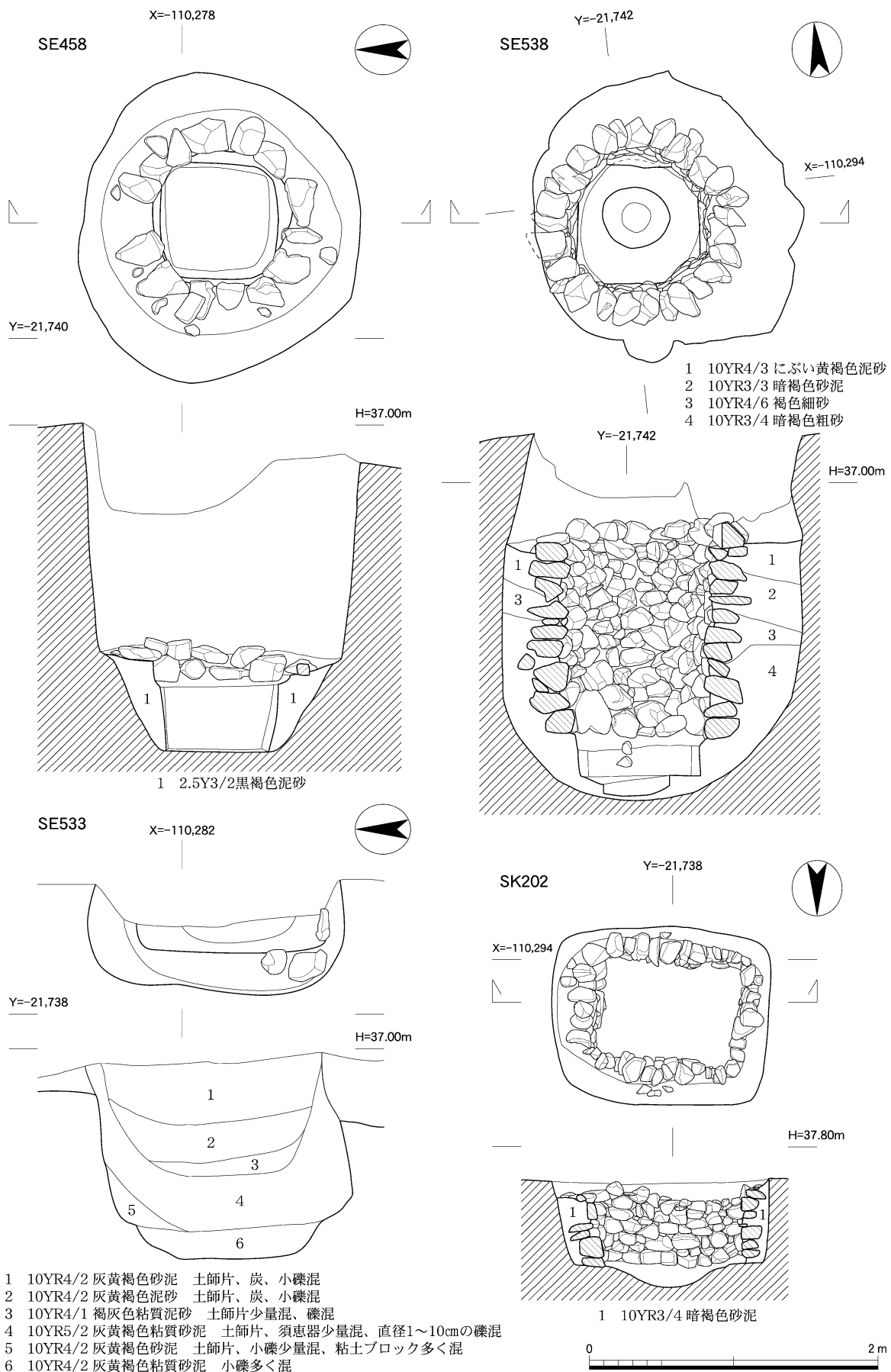


図7 SE458・538・533、SK202 実測図 (1 : 40)

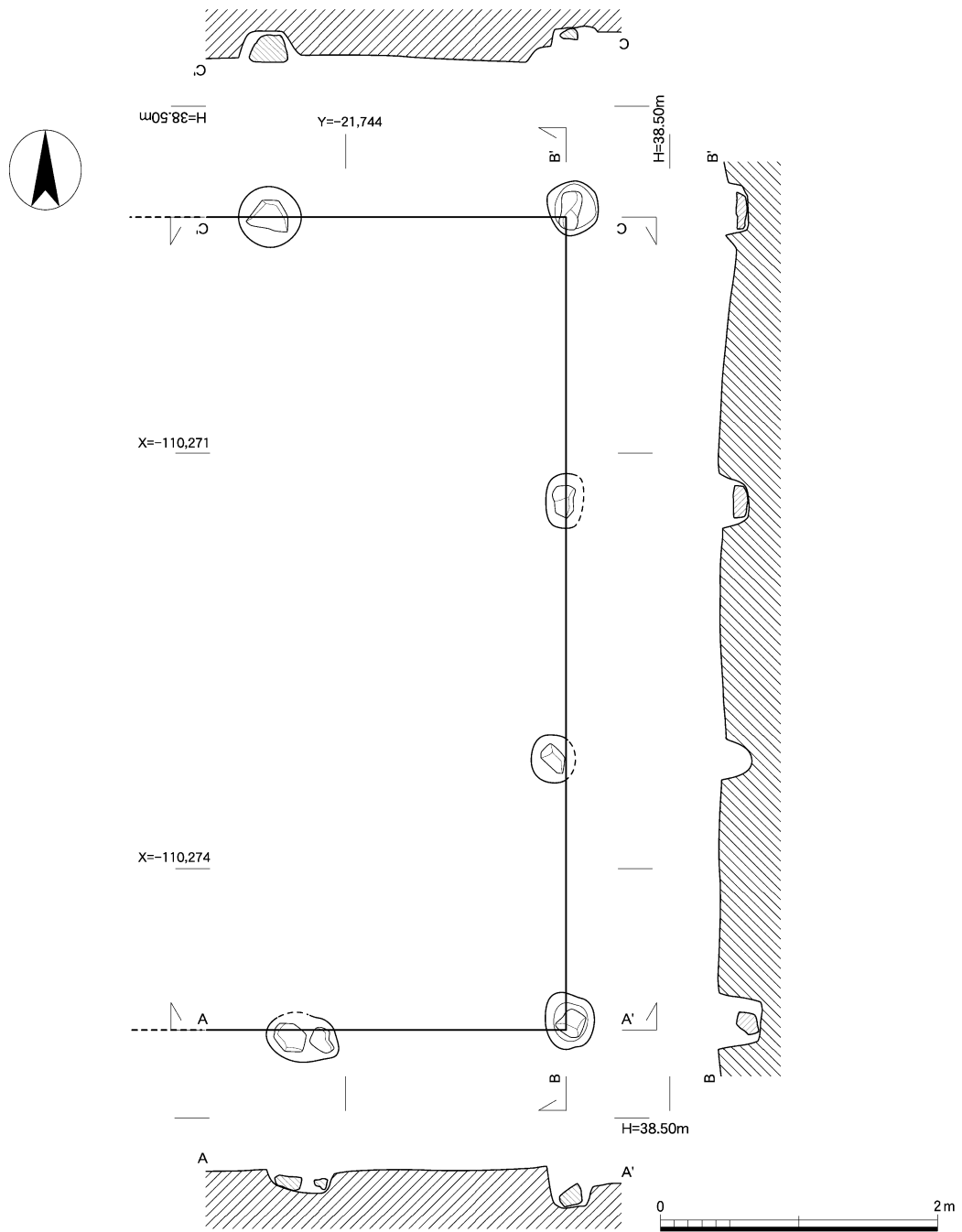


図8 SB 2実測図 (1 : 50)

各柱穴とも 0.15 ~ 0.2 m の方形の根石をもつ。15 世紀代の土師器小片が少量出土した。

SA 1 北部で検出した、SB 2 と重複した東西方向の柵列である。柱間 5 間分 (約 6.5 m) 確認した。15 世紀末頃 ~ 16 世紀初の土師器小片が少量出土した。

SK384・401・434・486・429・464・465・246・382 土取り穴である。SK384・401・434・486 から瓦質火鉢が出土しており接合する。また、SK429・464・465 からは瓦器鍋が出土しており接合する。SK246・382 からは瓦器羽釜が出土しており接合する。これらの遺物は 14 世紀後半 ~ 15 世紀代に属するものである。

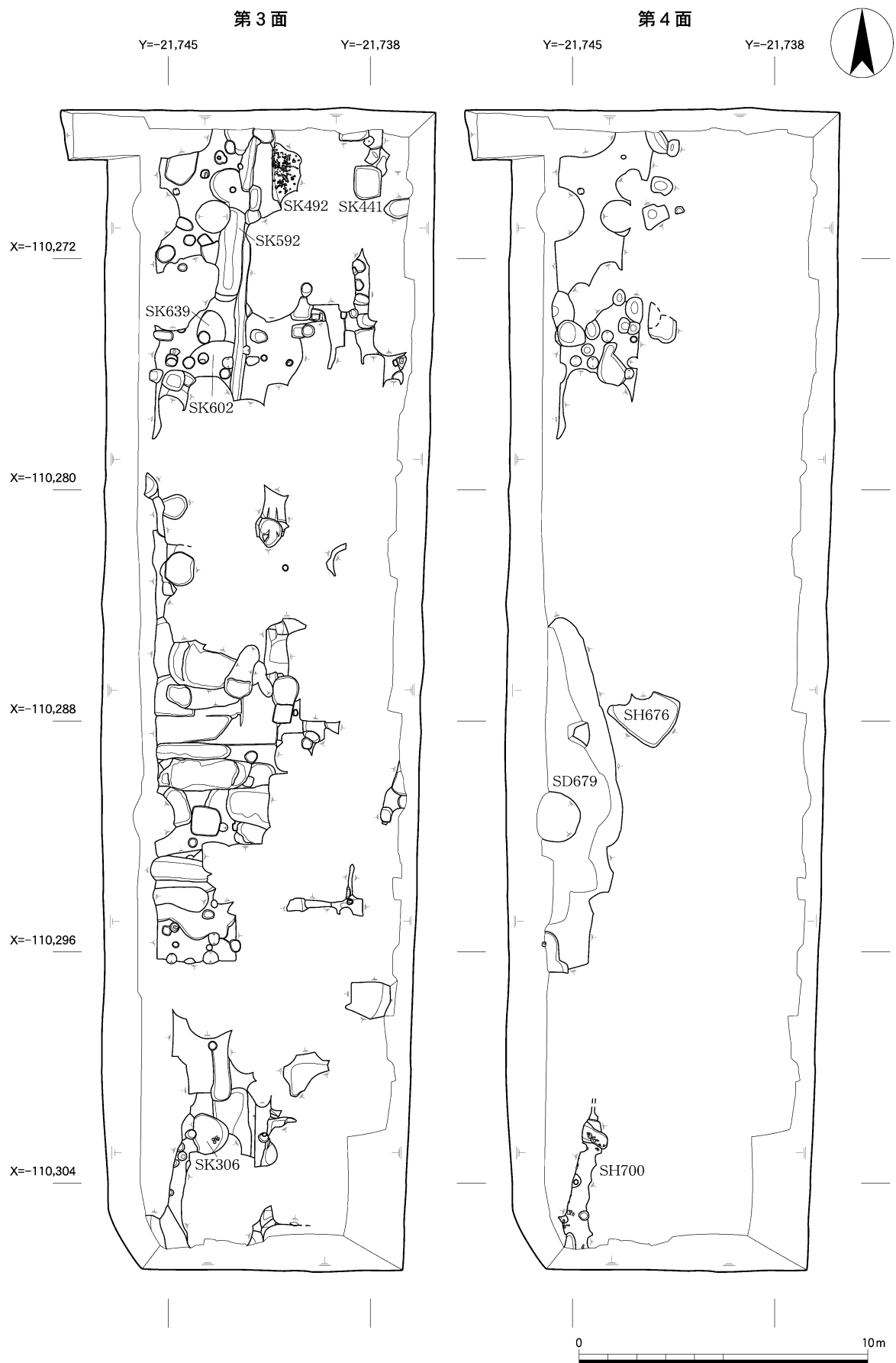


图9 第3・4面遺構平面図（1：200）

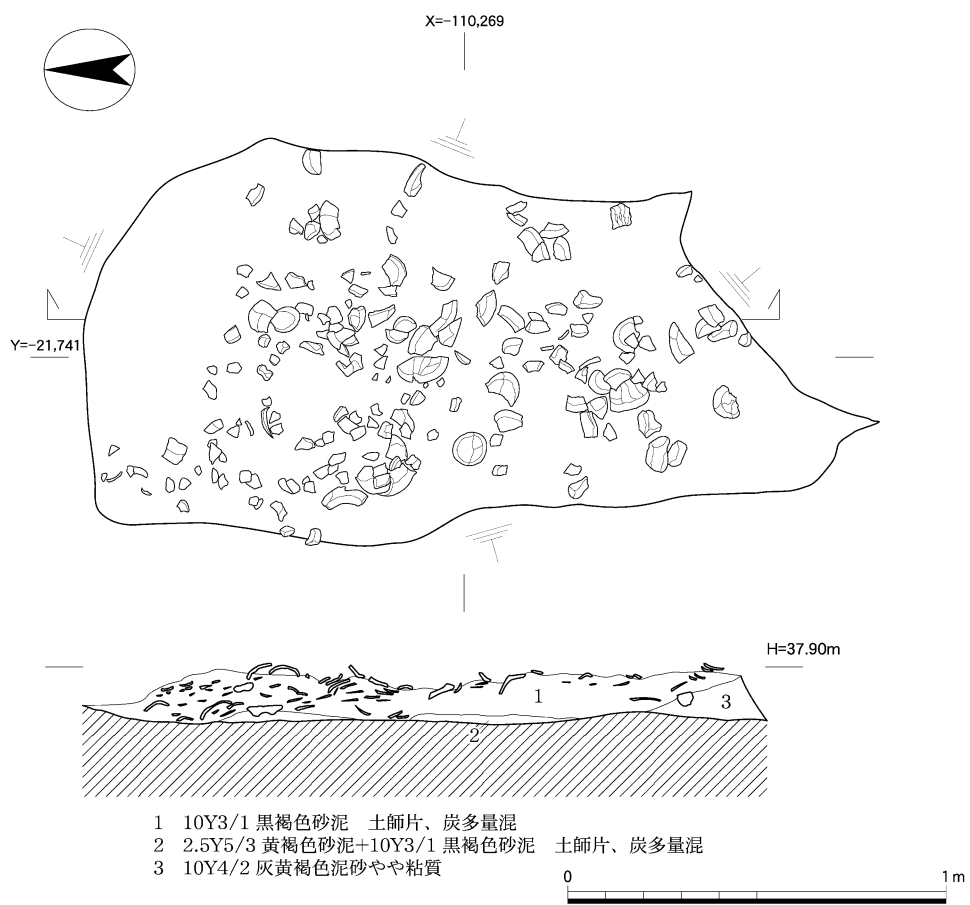
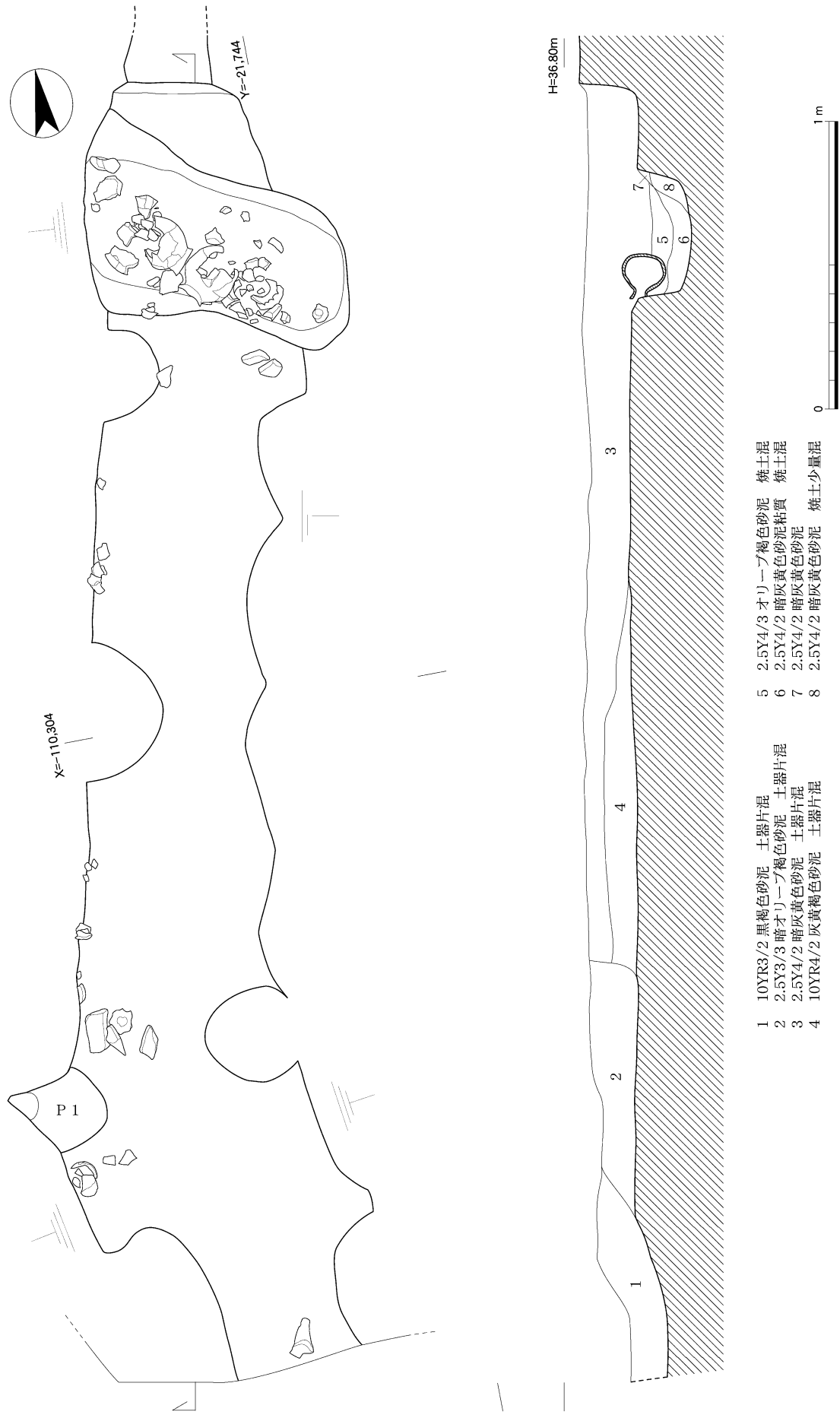


図 10 SK492 実測図 (1 : 20)



- | | | | | |
|---|-------------------|------|-------------------|-------|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 土器片混 | 2.5Y4/3 オリオーブ褐色砂泥 | 焼土混 |
| 2 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | 土器片混 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥粘質 | 焼土混 |
| 3 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 土器片混 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 焼土少量混 |
| 4 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 土器片混 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 焼土少量混 |

図 11 SH700 実測図 (1 : 20)

(3) 第3面の遺構 (図9、図版3-1)

第2面で検出した土取り穴群によって、地山上層の褐色砂泥層やシルト層がほとんど掘り取られており、オリーブ褐色砂泥の遺構面そのものがほとんど残存していない。一部遺構が残っているところもあるが、形態・規模などが不明なものが多い。

SK492 (図10) 北側で検出した、長辺2 m以上、短辺1 m以上、深さ0.15 mの皿状の形態を呈する。北・東・南辺を2面の遺構によって切られている。埋土は炭を多量に含む黒褐色砂泥で、13世紀中～後半に属する土師器皿が多量に出土した。

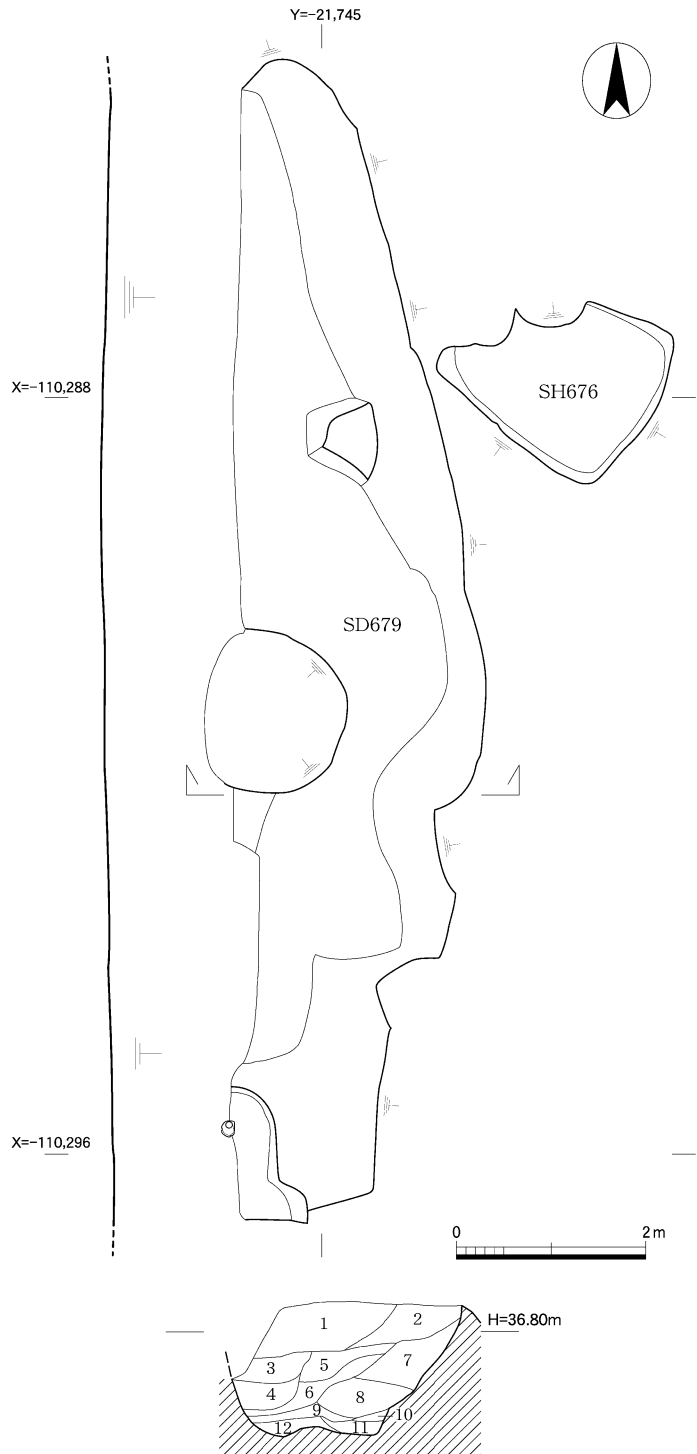
SK441 北東部で検出した遺構であるが、側面は残っていない。底部で南北1.1 m、東西0.8 mの方形を呈し、深さは0.7 mを測る。埋土は黒褐色砂泥で、13世紀中～後半に属する土師器皿が多量に出土した。

SK592 北西部で検出した長辺3.2 m、短辺0.8 m、深さ0.3 mの船底形の土壇である。埋土は暗灰黄色砂泥で、11世紀代の土師器が出土した。

SK306 南西部で検出した径1.4 m、深さ0.1 mの土壇である。埋土は黒褐色砂泥で、11世紀後半～12世紀前半の土師器皿が多量に出土した。

SK639 北西部で検出した長径1 m以上、短径0.8 mの長円形の土壇である。埋土は黒褐色砂泥がレンズ状に堆積し、11世紀前半～中頃の土

器類が出土した。



- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 10YR4/4~4/6 褐色砂泥 | 7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土 |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 8 2.5Y3/2 黒褐色粘土 弥生土器泥 |
| 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 | 9 2.5Y3/2 黒褐色粗砂 |
| 4 2.5Y5/1~5/2 暗灰黄色細砂 | 10 2.5Y3/1~3/2 黒褐色粘土 |
| 5 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 | 11 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 |
| 6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂 | 12 2.5Y4/2~4/3 オリーブ褐色粗砂 |

図12 SH676・SD679 実測図 (1:80)

(4) 第4面の遺構 (図9、図

版 4- 1)

北部では弥生土器小片を含む土壌状の遺構を検出したが、その性格は不明である。

SH700 (図 11、図版 4- 2・4- 3) 南西部で検出した竪穴住居跡であるが、後世の遺構によって大部分が壊されており、南北 4.5 m 以上で、幅 0.5 ～ 0.9 m で带状に残存しているだけで規模・形態などは不明である。検出面から床面までは 0.15 m 前後である。柱穴は 1 基 (P 1) 検出した。

北壁付近で、0.9 m 以上× 0.55 m、深さ 0.18 m の楕円形を呈する貯蔵穴を検出した。貯蔵穴内の埋土は、焼土を含んだオリーブ褐色砂泥・暗灰黄色砂泥である。床面からは有孔鉢・高杯・甕、貯蔵穴からは壺・甕が出土した。また、貯蔵穴から出土した甕内の土を洗浄・選別したところ炭化米を検出した。

SH676 (図 12) 中央部で検出した長軸 2.2 m、短軸 1.9 m、深さ 0.5 m の方形を呈する無支柱の小型住居跡である。北西部を土取り穴で壊されている。周溝などは検出されていない。

SD679 (図 12、図版 4- 4) 中央部西端で東肩を検出した幅 2.5 m 以上の自然流路である。深さは検出面から 1.4 m を測る。埋土 8 層から弥生時代中期の甕が出土した。

表 2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器35点		
古墳時代	須恵器		須恵器 4 点		
奈良時代	瓦		軒丸瓦 1 点、軒平瓦 1 点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、黒色土器、瓦、石製品		土師器35点、須恵器 2 点、緑釉陶器 1 点、灰釉陶器 2 点、黒色土器 2 点、軒丸瓦 3 点、軒平瓦 8 点、丸瓦 1 点、石帯 1 点		
中世	土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦		土師器95点、須恵器 1 点、瓦質土器 4 点、焼締陶器 1 点、輸入陶磁器 1 点、軒平瓦 1 点		
江戸時代	土師器、瓦質土器、陶器、磁器、焼締陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦、石製品		土師器45点、瓦質土器 2 点、陶器29点、磁器17点、焼締陶器 4 点、輸入陶磁器 3 点、軒平瓦 2 点、土製品 2 点		
合計		179箱	303点 (15箱)	164箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より12箱多くなっている。

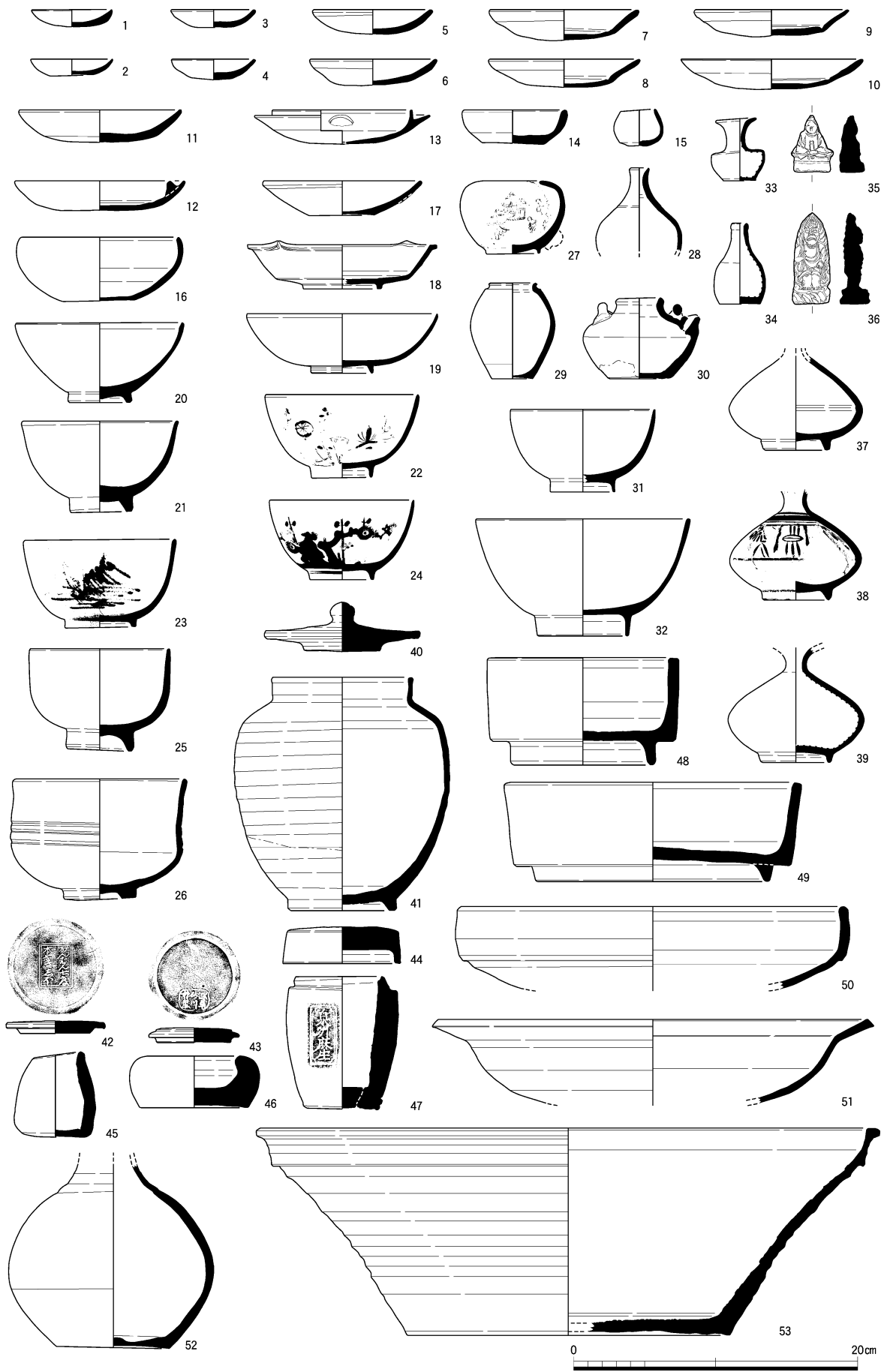


图 13 SK58 出土土器实测图 1 (1 : 4)

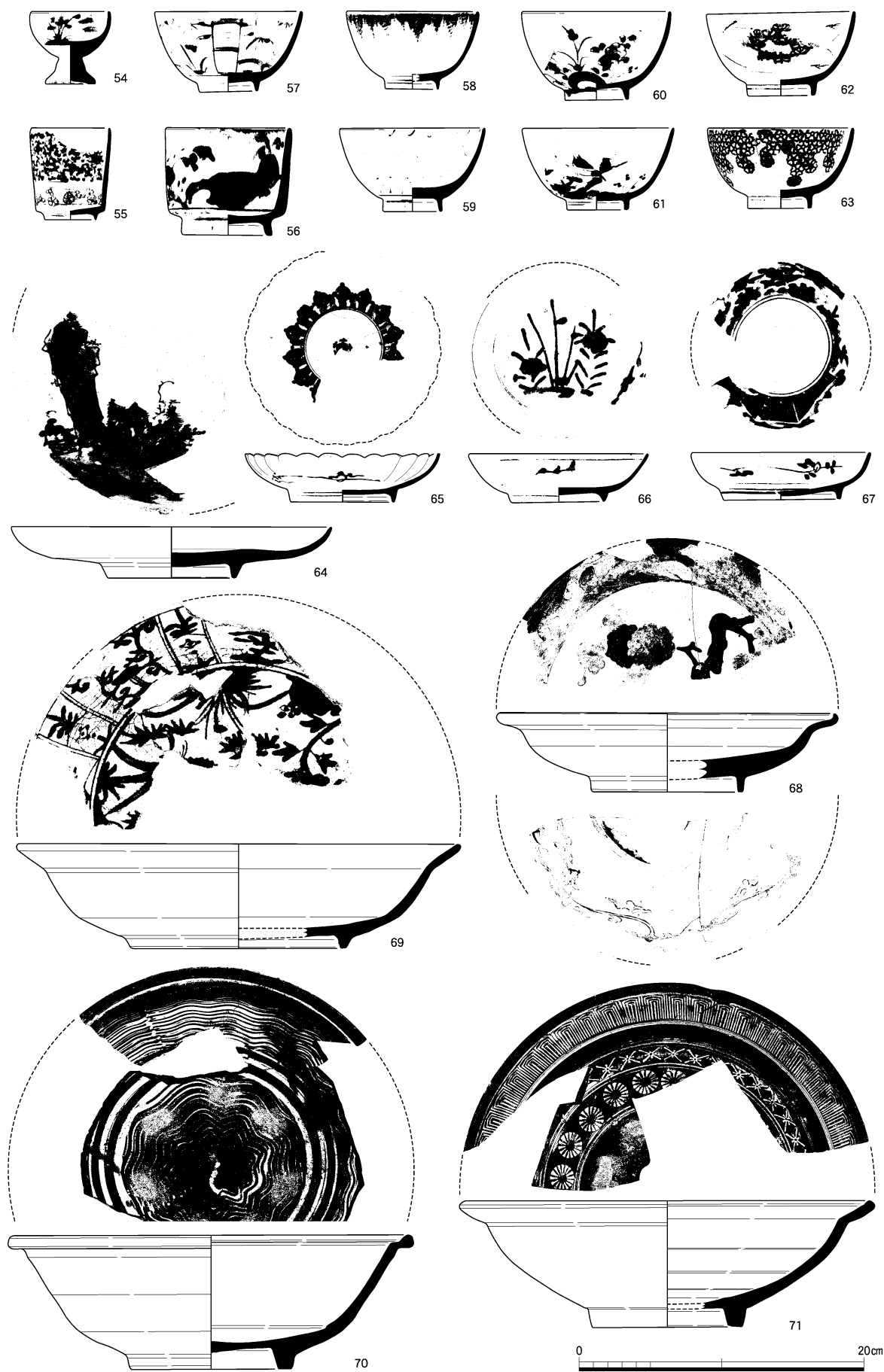


图 14 SK58 出土土器实测图 2 (1 : 4)

4. 遺物

遺物は整理箱に167箱出土している。そのほとんどが土器類であり、軒瓦類は非常に少ない。遺物の時期は、弥生時代・古墳時代・平安時代から江戸時代におよぶが、量的には、室町時代から江戸時代に属するものが多い。

江戸時代の遺物は、土壙や、大型のゴミ捨て穴などから多く出土した。土器類・金属製品・石製品などがある。土器類は、日常雑器が中心で、土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・染付などがある。金属製品は鉄釘・煙管（雁首・吸口）・銭貨、石製品は硯・砥石などがある。

室町時代の遺物は、土器類・瓦類・金属製品・石製品がある。土器類は、江戸時代と同様日常生活に用いられたものがほとんどで、土壙・土取り穴などから多く出土した。

平安時代・鎌倉時代の遺物には、土器類・瓦類がある。土器類には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器などがあり、土壙・整地層から出土した。瓦類は遺構に伴って出土していない。

古墳時代の遺物は5世紀～7世紀の須恵器が後世の遺構に混入して出土した。

弥生時代の遺物は、住居跡・流路跡・土壙などから出土した。

(1) 土器類

SK58 出土土器（1～71）（図13・14）

土師器、国産陶磁器、焼締陶器、輸入陶器などがある。

土師器には皿（1～10）、鉢（14・16）、火入れ（48・49）、小壺（15）、焼塩壺・蓋（42～47）、焙烙（50・51）がある。1～4は皿Nr。口径は6cm前後。5・6は皿Sb。口径は9cm前後。7～10は皿S。口径11cm前後であるが大きいものもある。8は端部に煤付着。鉢は体部が内弯気味に立ち上がる。底部はヘラケズリ。火入れはロクロ成形で体部は直線的に立ち上がり、外面は丁寧にヘラミガキしている。高台を付す。42は「なんばん七度本やき志不」、43は「深草砂川□□」、47は「泉州麻生」の刻印がある。46は丁寧に作りで、胎土・焼成とも良好である。

11・12は軟質施釉陶器灯明皿、灯明受皿。13は備前灯明受皿。17～25は京焼・京焼風肥前陶器。18は輪花皿。20は平椀。26は美濃筒形椀。体部に3条の沈線を施す。27は肥前上絵香炉。28は備前壺。29は美濃茶入れ。37・38は肥前色絵香油壺。30は軟質施釉陶器鉄釉土瓶。胴部から上半に釉がかかり、底部に糸切り痕が残る。33・34は軟質陶器ミニチュア壺。33は無釉。34は暗オリーブ色から明黄褐色の釉薬を施す。35・36は軟質ミニチュア人形。型作りで、全面施釉。36は不動明王。35は天神か。

40は蓋。天井部中央につまみが付く。内面糸切り。外面褐色の釉薬を施す。41は壺。体部下半ヘラケズリ。浅黄色の胎土に口縁部から体部中位に褐色の釉薬を施す。産地不明。52は備前壺。53は信楽の播鉢。播目は1単位5本。

31・32は大小の白磁椀。31は口縁端部に鉄釉を塗る。39は白磁壺。

54～67は肥前磁器。54は仏飯器。55は筒形鉢。56は筒形椀。64はやや大型の皿で内面に

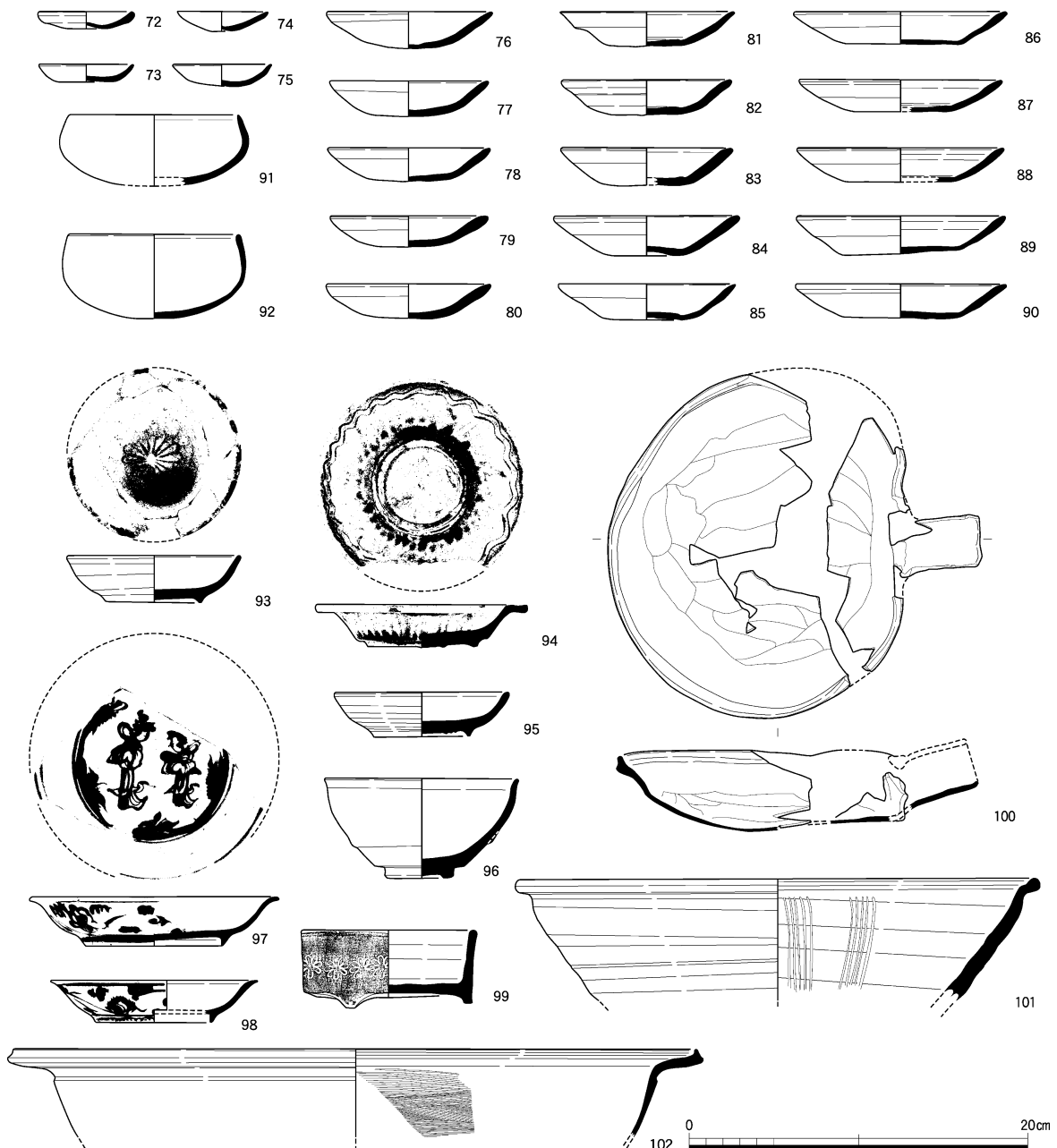


図 15 SK311 出土土器実測図 (1 : 4)

山水文を描く。65 は輪花皿。68 は肥前陶器古九谷様式の鉢。70・71 は肥前陶器鉢。内面に灰釉を施し、化粧土で施文。内面に砂目あり。唐津産。

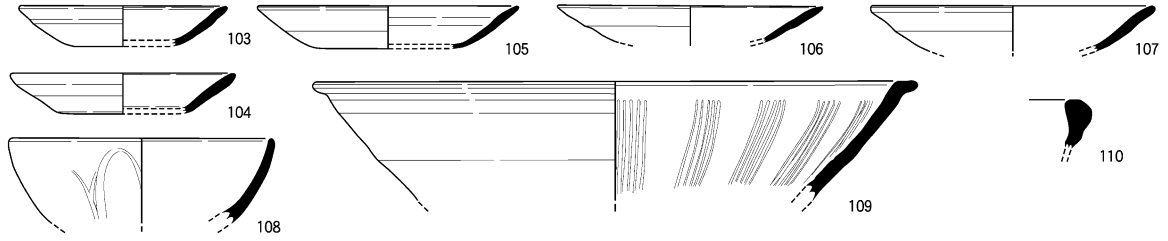
69 は輸入陶器皿。芙蓉手で花鳥文を描く。漳州窯産。

SK311 出土土器 (72 ~ 102) (図 15)

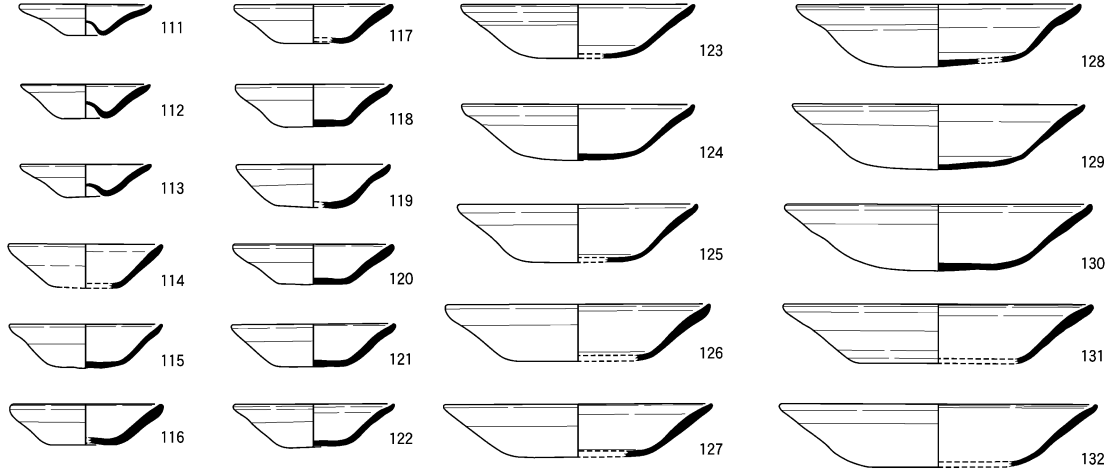
土師器、瓦器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、焼締陶器がある。

土師器は皿 Nr (72 ~ 75)、皿 Sb (76 ~ 80)、皿 S (81 ~ 90)、椀 (91・92)、焙烙 (100・102) がある。皿 Nr は口径が 5 cm 台である。皿 Sb は口径が 9 cm 台で、口縁端部は丸味をもつものが多い。皿 S は口径が 10 cm 台と 12 cm 台がある。椀は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部は内傾し端部は丸味をもつ。色調は灰白色を呈する。100 の焙烙は不正円形の皿状の器形に把手が

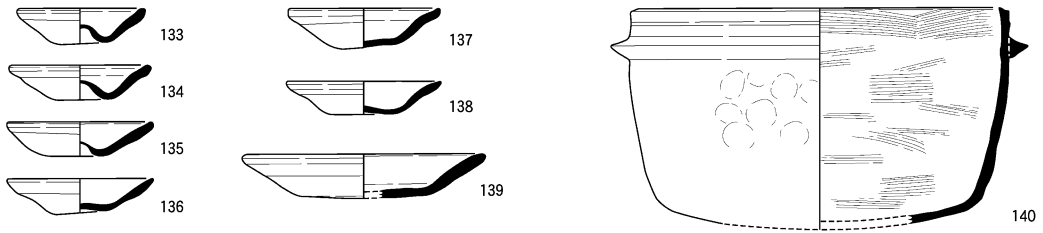
SD313



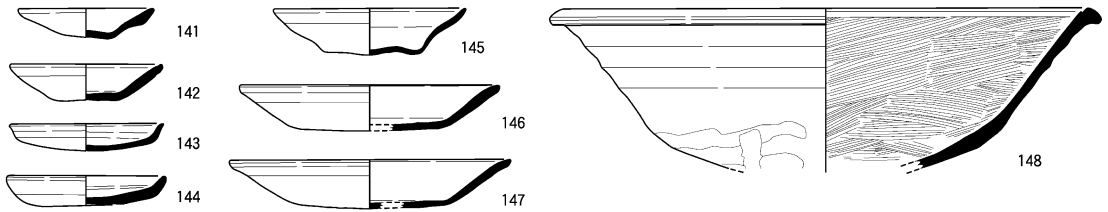
SK381



SK246 · 382



SK429 · 464 · 465



SK384 · 401 · 434 · 486

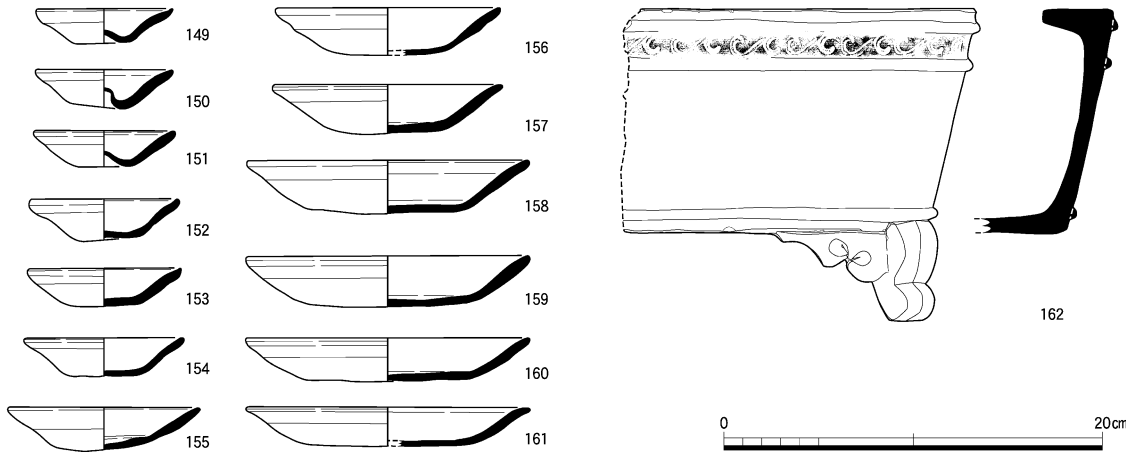


图 16 SD313、SK381、SK246 · 382、SK429 · 464 · 465、SK384 · 401 · 434 · 486 出土土器实测图 (1 : 4)

付く。体底部は内外面ともヘラケズリ調整され、器壁は非常に薄い。底部内面は焦げている。焙烙鍋(102)は口縁部が屈曲して開き、端部内面は上方に突起する。体部内面はヨコ方向のハケ調整。

国産施釉陶器は瀬戸美濃の皿(93～95)と天目椀(96)。93は底部内面に型押の菊文。口縁部に煤付着。94は折縁菊皿。底部内外面に輪トチン痕。

97・98は輸入染付皿。97は底部内面に向かい合う天女を描く。

瓦器(99)は三足香炉。体部外面はタテミガキの後、印刻蓮花文を施す。

焼締陶器(101)は信楽産の播鉢。播目は1単位5本。

SD313 出土土器(103～110)(図16、図版5)

土師器、輸入陶磁器、焼締陶器がある。

土師器皿S(103～107)と鍋(110)がある。皿Sはいずれも小片で全形を知りうるものはないが、16世紀代の様相をもつ。110は破片が小さく断面だけ図化した。口縁端部が肥厚した鍋の破片と考える。

108は龍泉窯の青磁椀。外面に蓮弁文を描く。

109は信楽産の播鉢。播目は1単位5本。内面は擦り減る。

SK381 出土土器(111～132)(図16、図版5)

15世紀前半～中頃の土師器皿が一括破棄された土器群。皿S、皿Shがあるが皿Sが主体を占める。皿Nは小片がわずかに出土しているにすぎない。皿Sは口径8cm台の皿S小(114～122)、12cm台の皿S大1(123～125)、14cm台の皿S大2(126～128)、16cm台の皿S大3(129～132)に四分できる。体部がなだらかに外反し、口縁端部がつまみ上げられた形態をなす。皿S大は出土した数も多く、形態も多少の個体差がある。体部の外反が弱い個体や口縁端部のつまみ上げがほとんどみられない個体もある。皿Shは口径6.8cm前後、器高1.7cm前後である。出土量は少ない。皿Sは色が赤みを帯びる群と、本来の白から黄白色の群に分類できる。この土器群の特徴は皿S大3以外は赤系の皿Sが大半を占めることである。

SK246・SK382 出土土器(133～140)(図16)

土師器皿(134・135・138)はSK246、土師器皿(133・136・137・139)はSK382から出土した。

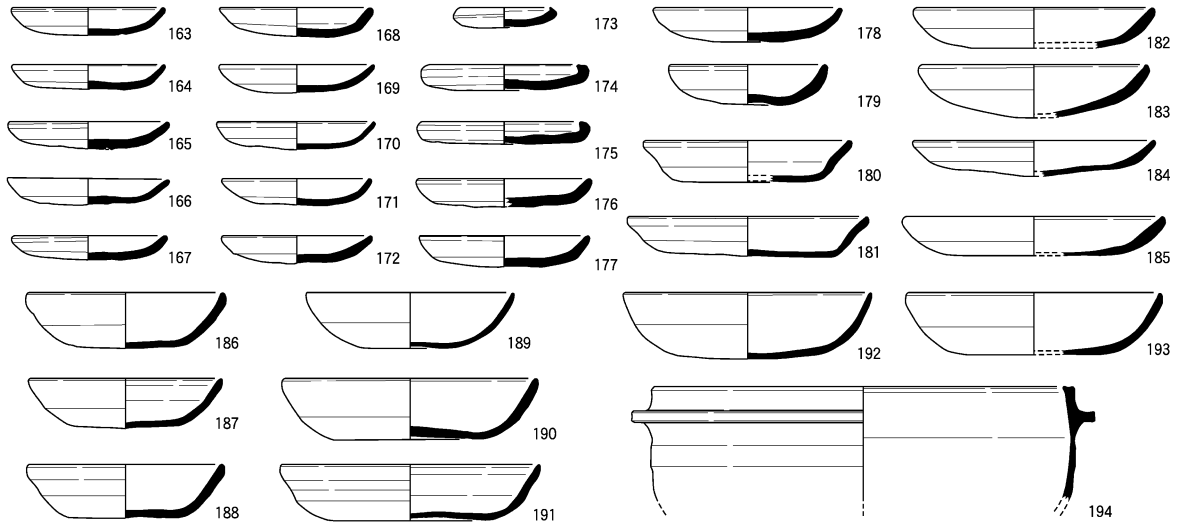
瓦質土器羽釜(140)はSK246・SK382から出土し、接合した。体部・口縁部は直線的に立ち上がり、断面三角形の鏝が付く。鏝から口縁部にかけてヨコナデ調整。内面は口縁部から体部はヨコ方向、底部は一定方向の刷毛目調整を施す。外面に指オサエの跡が残る。

SK429・SK464・SK465 出土土器(141～148)(図16)

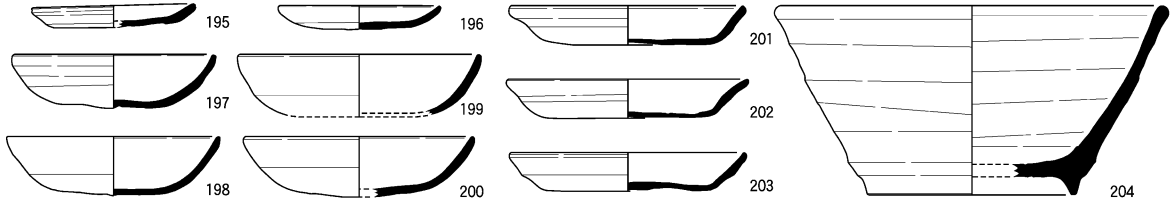
土師器皿(147)はSK429、土師器皿(144)はSK464、土師器皿(141～143・145・146)はSK465から出土した。

瓦質土器鍋(148)はSK429・464・465から出土し、接合した。体部・口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部は内側に折れ、内面は返し状に凹みがめぐる。口縁部はヨコナデ調整。外面は体部は指オサエ痕が残る、底部は不定方向のヘラケズリ。体部から口縁部に煤付着。内面は

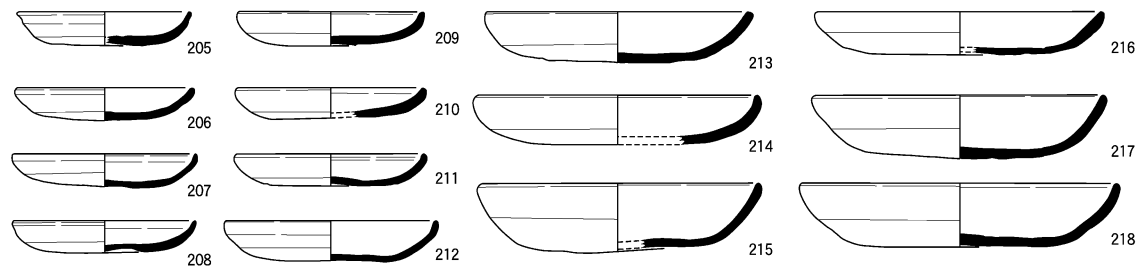
SK492



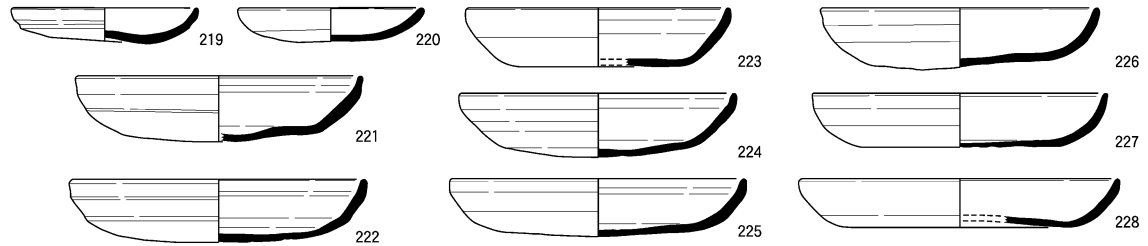
SK441



SK306



SK592



SK639

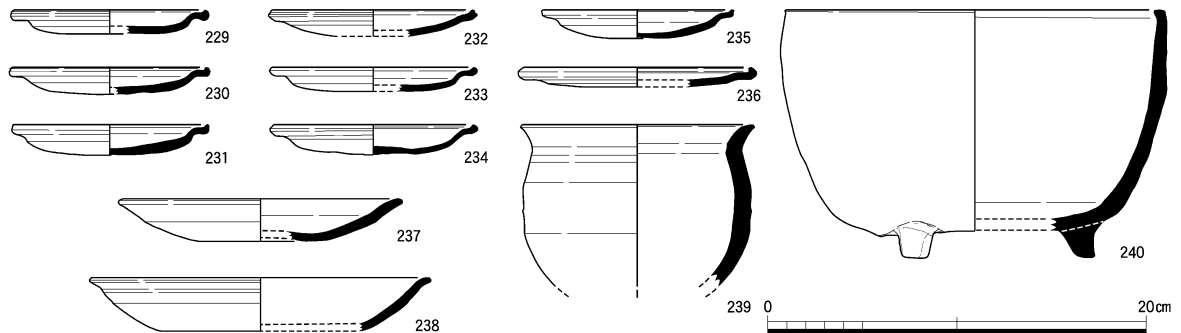


图 17 SK492 · 441 · 306 · 592 · 639 出土土器实测图 (1 : 4)

ヨコ方向のハケメ調整。底部に付着物がある。

SK384・401・SK434・SK486 出土土器 (149～162) (図16)

土師器皿 (149・152・153・157・159・160) はSK401、土師器皿 (150・155・161) はSK434、土師器皿 (151・154・156・158) はSK486 出土した。

瓦質土器箱型火舎 (162) はSK384・401・434・486 から出土し、接合した。口縁部直下に二条の凸帯で区画をつくり、凸帯の間を2単位左行唐草文のスタンプ文で装飾する。脚部は獣脚でヘラで成型されている。外面は口縁部、体部、脚部はヘラミガキ調整。内面はナデ調整。

SK492 出土土器 (163～194) (図17、図版5)

13世紀中頃～後半に属する土師器皿が一括破棄された土器群。皿Ac、皿N、皿Sがある。皿Ac (173～175) は口径8cm前後で4cm台のものもある。白色系の胎土である。皿Nは三角形状の口縁端部が丸味をもち、体部はやや外反する。皿N小 (163～172・176～178) は口径8cm台、器高1.5cm前後が中心である。176～178は白色系の胎土である。皿N大 (180～185) は口径10.6～13.6cmのものがあり、口径12.5cm台、器高2cm前後が中心である。皿S小 (179) は口径8cm前後、口径2cm強である。皿S中 (186～189) は口径10cm台が中心である。皿S大 (190～193) は口径13cm台が中心である。瓦器羽釜 (194) は半球形の体部に直立する口縁部をもつ。口縁部下に断面方形の鏝を付す。

SK441 出土土器 (195～204) (図17、図版6)

13世紀中頃～後半に属する土師器皿が多量に出土した。口径8.5cm前後の皿N小 (195・196)、口径10～12cm前後の皿N大 (201～203)、口径10cm台の皿S中 (197・198)、口径12cm台の皿S大 (199・200) がある。皿N小は白色系の色調の胎土である。204は須恵器山茶椀。体部は直線的に開き、端部は丸く収める。内外面ヨコナデ調整を施すが、外面体部と底部の界はヘラケズリ調整。

SK306 出土土器 (205～218) (図17、図版6)

土師器皿Nは体部上半から口縁部外面にかけてナデによる浅い二段の凹みを持ち、立ち上がった口縁端部はやや外傾する。皿N小 (205～211) は口径9.0cm台後半を中心に9.0cm台～10cm、器高1.0cm台後半が中心である。皿N大 (213～218) は口径14～15cm台、器高2cm台後半であるが、器高の高い深手のもの (215・217) もある。大と小の中間的な口径のもの (212) もある。

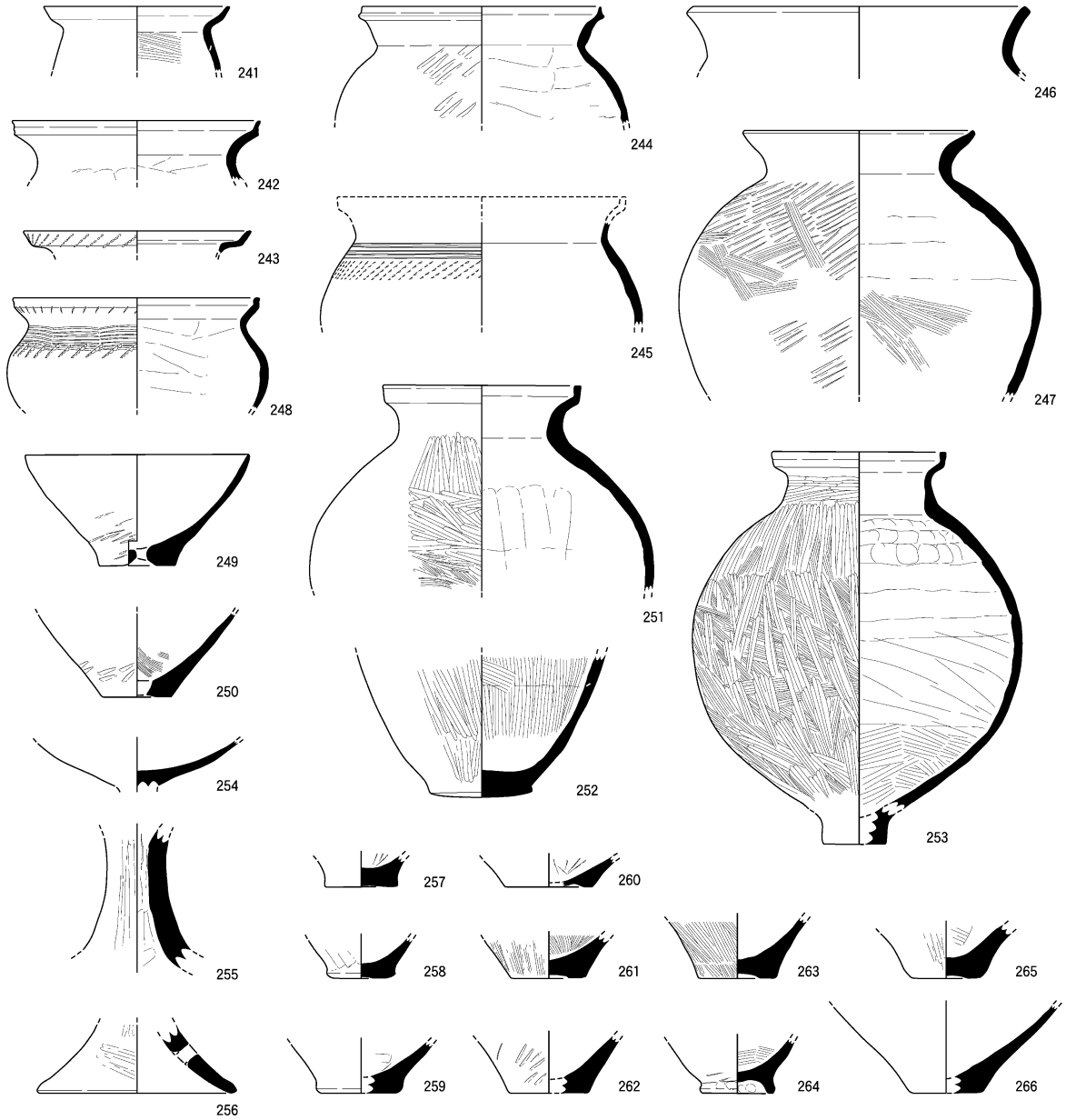
SK592 出土土器 (219～228) (図17、図版6)

土師器皿Nは体部上端から口縁部の形態はナデによる二段の凹みをもち、端部を上方へ立ち上げ、端部だけが外反状を呈する。法量は、皿N小 (219・220) が口径9.0cm台後半、器高1.0cm後半。皿N大 (221～228) が口径13.6～15.4cm、器高3cm台である。

SK639 出土土器 (229～240) (図17、図版6)

土師器皿A (229～235) は体部上半から口縁部が外反し、端部はつまみ上げたように丸く収めるいわゆる「ての字状口縁」である。口径10cm台、器高1.5cm前後である。コースター形の皿

SH700



SD679

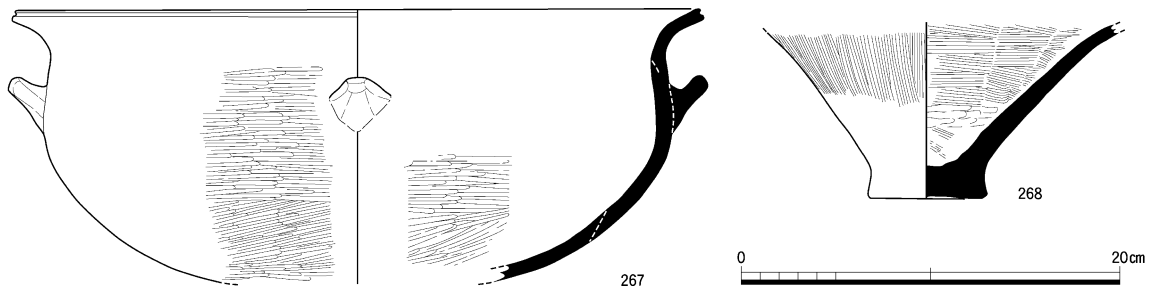


図 18 SH700・SD679 出土土器実測図（1：4）

Ac (236) は口縁端部を内側に折りかえす。皿 N (237・238) は外反する口縁端部の内側に端面をもち、体部上半から口縁部外面はナデによる二段に凹みをもつ。下段の方が強く凹む。土師器甕 (239) は球形の胴部に外反する短い口縁部をもつ小型品。

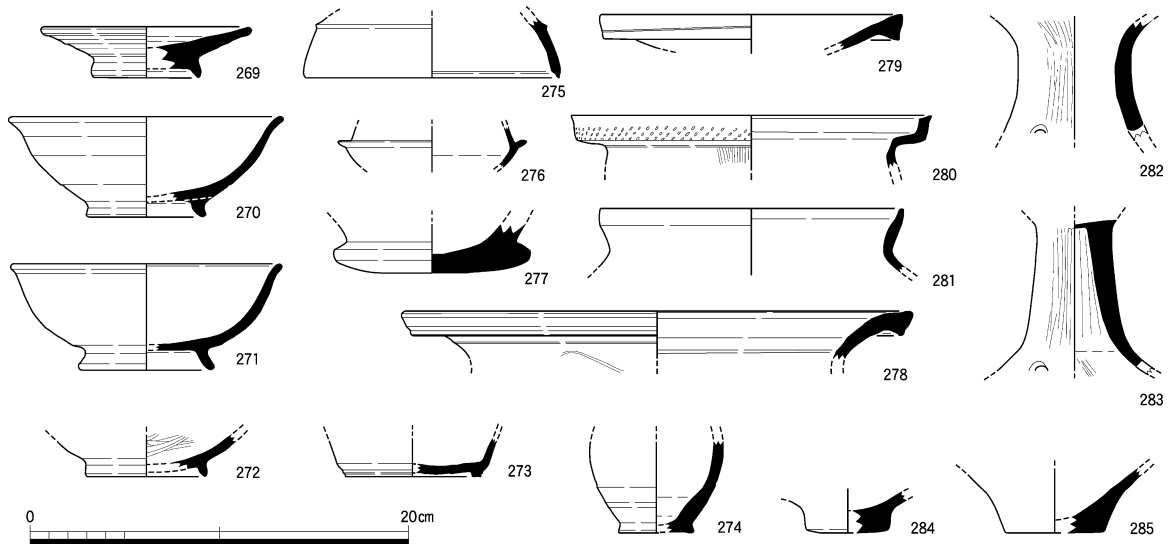


図 19 その他の出土土器実測図（1：4）

黒色土器 A 三足鉢（240）はやや丸味をもった体部に直線的に立ち上がる口縁部をもつ。内面および口縁部外面ヨコナデ調整。外面体部から足部は赤泥を塗る。大和系か。

SH700 出土土器（241～266）（図 18、図版 7）

床面および貯蔵穴から出土した弥生時代後期後半の土器群。241～243・245 は受口状口縁甕。243 は口縁部下端に櫛描烈点文を施す。245 は口縁部を欠損しているが、胴部の文様帯は櫛描直線文、櫛描烈点文の二帯。244・246・247 はくの字口縁甕。244 は口縁端部をつまみ上げる。胴部外面は右上がりの粗いタタキを施す。247 は球形の胴部に外反する口縁部をもつ。胴部外面は右上がりのタタキの後部分的に縦、斜目方向のハケメ調整を施す。248 は受口状口縁鉢。口縁部下端にヘラ描刺突文を施す。体部の文様帯は櫛描直線文、櫛描烈点文の二帯。体部下半に煤付着。体部内面は板状工具のナデ調整。249・250 は有孔鉢。体部下半にタタキを施す。249 は焼成後穿孔。251・253 は球形の胴部に受口状口縁を付した壺。胴部外面はハケメ調整の後、縦・斜め方向のミガキを施す。253 は頸部にも横方向のミガキを施す。252 は壺の胴下半から底部。胴下半部は縦方向のミガキ。底部は一定方向のミガキ調整を施す。面は縦方向のハケメ調整。254～256 は高杯。256 は脚裾部片で外面ミガキで裾端部はナデ調整。一孔を確認。264 は台付小型土器の底部。265・266 は壺底部。外面ミガキ調整。

SD679 出土土器（267・268）（図 18）

267 は口径 36 cm を越える大型の鉢で、半球形の体部に外反する口縁部をもつ。口縁部端面に一条の沈線文を施す。体部上半には瘤状把手が 4 箇所につく。口縁部内外面はナデ、体部内外面は横方向の丁寧なミガキ調整。弥生時代前期。268 は大型の器形の体底部。体部はハケメ、底部はナデ調整。底部は厚い。

その他の出土土器（269～285）（図 19、図版 7）

上記の遺構出土土器以外で重要と判断した土器をここに掲載する。いずれも後世の遺構から出土した。

平安時代：269 は緑釉陶器皿。灰白色の胎土に濃緑色の釉薬を全面に施釉。270・271 は灰釉陶器椀。内弯気味に立ち上がる体部に外反する口縁部をもつ。底部糸切り。口縁部および体部内面施釉。272 は黒色土器 B 椀。内外面粗いミガキ調整。273 は須恵器杯 B。274 は須恵器壺 M。

古墳時代：275 は須恵器杯蓋。天井部と口縁部とをわける稜線はにぶく、外方へ突出しない。端面は内側に傾斜し、凹む。6 世紀。276 は須恵器杯身。口径は小さく、器壁は薄い。7 世紀前

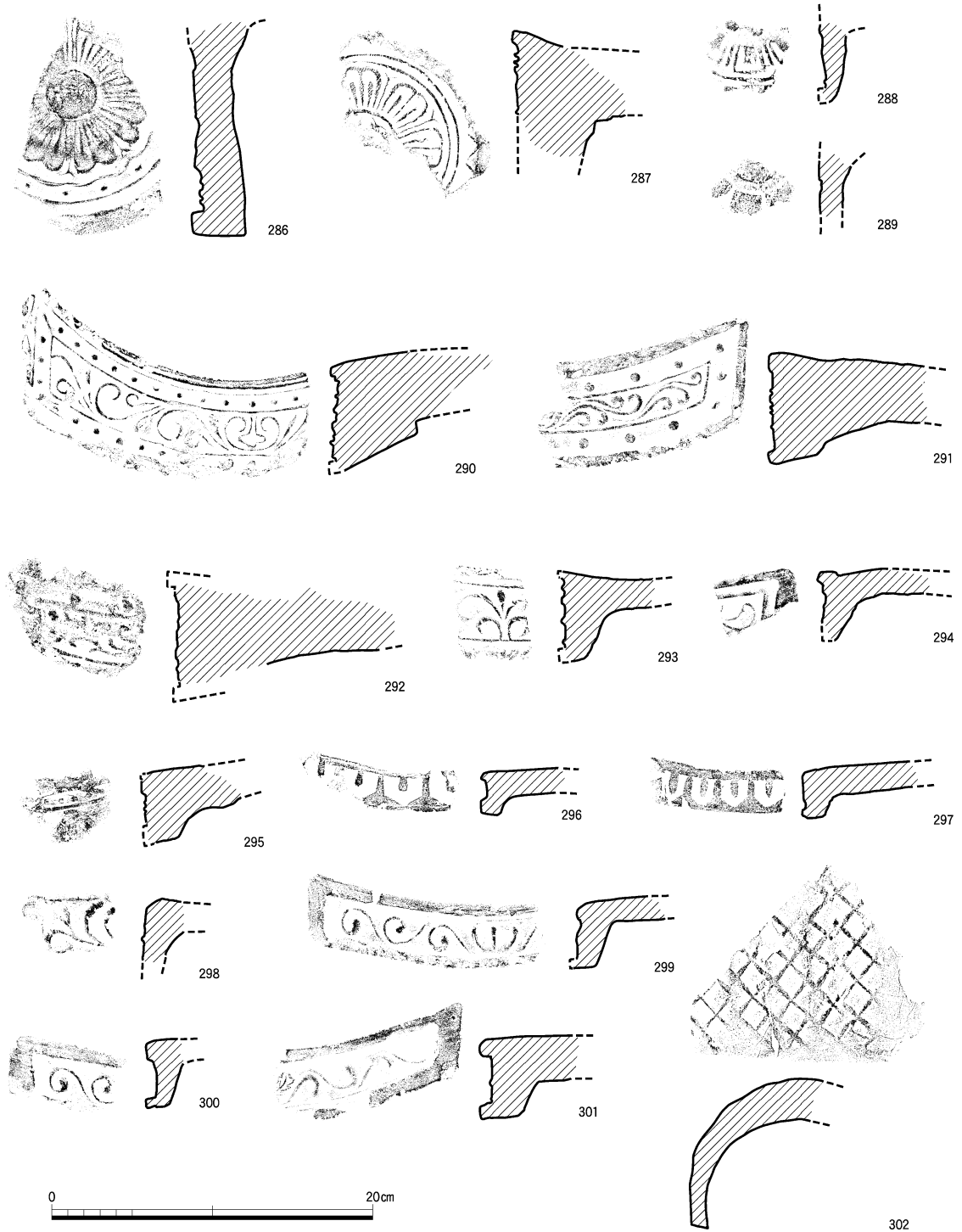


図 20 瓦拓影・実測図（1：4）

半。277 は須恵器播鉢。厚い円盤状の底部で体部は外上方へ直線的に開く。底部はヘラ切り。古墳時代後期。278 は須恵器甕。口縁部は外反して開き、端部は垂下する。口縁部外面にヘラで施文。断面セピア色を呈する。古墳時代後期。

弥生時代：279 は筒形器台の口縁部。ミガキが施されているが磨滅しており不鮮明。280 は受口状口縁の甕。口縁部に櫛描烈点文を施す。281 はくの字状口縁甕。受口状口縁のくずれたものか。282 は筒形器台の体部。外面縦方向のミガキ。3孔を穿つ。283 は高杯の脚部。外面縦方向のミガキ。裾部に3孔を穿つ。284・285 は壺底部。284 は外面一定方向のミガキ調整。

279・280・283 は SH676 を切る後世の遺構から出土。281・282・284・285 は SH700 を切る後世の遺構から出土。

(2) 瓦類 (図 20、図版 8)

軒瓦類は 16 点出土しているが、遺構に伴うものは出土していない。

蓮華文軒丸瓦 (286) 複弁で蓮弁は互いに接し盛り上がる。間弁は先端が分かれる。弁区と外区とを分ける界線は波状。中房は段状に突出しその中に「大伴？」字を入れる。蓮子はない。平安時代前期。

蓮華文軒丸瓦 (287) 複弁で蓮弁は凸線で間弁は Y 字形。界線は二重。傾斜縁で線鋸歯文を配する。奈良時代後期。平城宮 6228 B 形式。

単弁蓮華文軒丸瓦 (288) 梯形に近い花卉で、弁子は長方形で比較的大きい。先の尖った短線で表現された弁間文をもつ。瓦当裏面は指圧痕。平安時代後期。

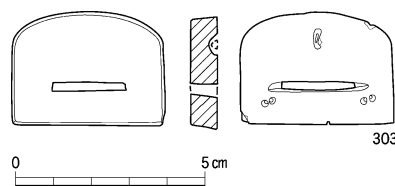


図 21 石帯実測図 (1 : 2)

蓮華文軒丸瓦 (289) 平安時代後期。興福寺 11101。

均整唐草文軒平瓦 (290) 花頭文の垂飾りを中心飾りとし、それより左右対称に大きく 3 反転する唐草文を配した内区文様を界線が取り囲み、外区に珠文帯を配する。奈良時代。平城宮 6664 D 形式。

均整唐草文軒平瓦 (291) 中心飾りは上向き C 字形が左右に分離し、3 葉を配す。二葉の蕨手が 3 反転する。珠文は大粒。平安時代前期。『平安京古瓦図録』335。西加茂角社瓦窯。

均整唐草文軒平瓦 (292) 平安時代前期。

唐草文軒平瓦 (293) 平安時代後期。

唐草文軒平瓦 (294) 平安時代後期。『坂東善平収蔵品目録』35。

珠文軒平瓦 (295) 平安時代中期。

剣頭文軒平瓦 (296・297) 製作技法は折り曲げ式。平安時代末期。

唐草文軒平瓦 (298) 平安時代後期。

均整唐草文軒平瓦 (299) 中心飾りは 3 葉形。室町時代。

唐草文軒平瓦 (300) 近世初頭。

唐草文軒平瓦 (301) 中心飾りは桐文。半截され、側面に擦痕がある。用途不明。近世初頭。

丸瓦（302）外面格子目叩き。九州産。平安時代中期か。

（3）石製品（図 21）

石製品としては石帯、砥石、硯などが出土した。

303 は暗緑灰色の石材を用い、表面の研磨は丁寧で、光沢を帯びる。裏面の3箇所には潜り孔をあける。丸靱の一種（櫛上と呼ばれたものか）。2層出土。

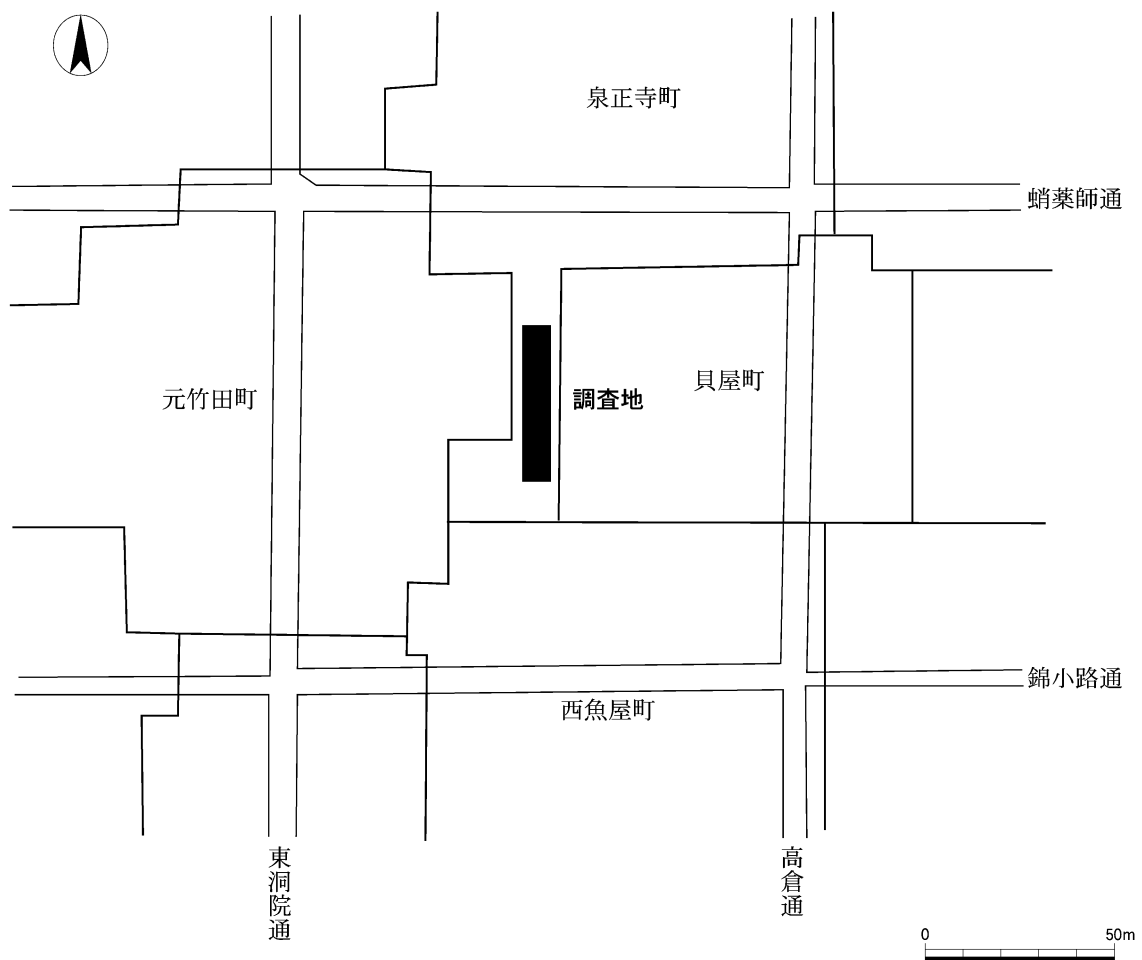


図 22 町割り図（1：2,000）

5. まとめ

今回の調査では、江戸時代・室町時代・鎌倉時代から平安時代・弥生時代の遺構を4面にわたって調査した。

今回の調査成果の一つは、室町時代後期の幅2.4m、深さ1.6mの堀を南北40mにわたって確認したことである。堀は16世紀前半に開削され、16世紀末頃に埋められている。堀は三町域のほぼ東西の中心に位置している。町組の地割・防御・排水などの機能をもった施設と考えられるが、その画する範囲は不明である。

室町時代後期の絵画資料・文献史料をみると、上杉家本の『洛中洛外図屏風』の右隻第3扇に「竹田法印」の書き入れのもと、その邸宅が描かれている。邸宅は二筋南に祇園会で賑わう四条通がみえるところから、錦小路の傍らしい。門は西面し、門前の道路は室町通から東へ二筋目に当たるから東洞院通となる。現在の市街図では、東洞院通錦小路上ルは「元竹田町」。『蜷川古文書集』第10集には、大永2年(1522)9月14日付「竹田法印敷地御請文案文」が収まっており、それに記された「東洞院東頬(東側)、南は錦小路、北は四条坊門(蛸薬師)」とあるのに符合し、さらに「(南北)一町、東西廿五丈」と、その規模まで知れる¹⁾。

今回検出した堀はこの邸宅の東限を画する遺構と考えることができる。残念ながら、堀の西側は、これまでの調査成果からも推測することはできず、堀の規模も不明である。

室町時代後半から江戸時代の初め頃の土取り土壌、ごみ捨て穴が多く検出された。このような土壌が掘られるのは京都の町区分と関連していると考えられる。15世紀末頃には街路を鉢む向かいの町と合して一つの町(西側町)が構成される。4つの町の境界付近は空間として残ると考えられる。調査区は泉正寺町地内に位置しているが、西側はもと竹田町、東側は貝屋町の境界付近に位置しており、ちょうど町境の空間地となっていたとみられる。したがって、土取土壌やごみ捨て穴が多く作られたと考えられよう。

註

- 1) 『京都の歴史 第4巻 桃山の開化』京都市史編さん所 別添地図解説

版 图

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうしぼうさんちょうあと							
書名	平安京左京四条四坊三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-28							
編著者名	伊藤 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 しじょうしぼうさんちょうあと 四条四坊三町跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 たごやくしどおりひがしのとういん 蛸薬師通東洞院 ひがしいるせんしょうじちょう 東入泉正寺町 にしゅうおやちょう 320・西魚屋町 612-1・612-2	26100		35度 00分 20秒	135度 45分 42秒	2006年10月 20日～2007 年2月14日	441m ²	マンション 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 四条四坊三町跡	都城跡	弥生時代	竪穴住居、流路、 土壌	弥生土器				
		平安時代	土壌	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、瓦				
		鎌倉時代	土壌	土師器、須恵器、輸入 陶磁器、瓦質土器、瓦				
		室町時代	堀、石組井戸、石 組土壌、土壌、溝、 建物、柵列	土師器、須恵器、輸入 陶磁器、瓦質土器、瓦				
		江戸時代	井戸、土壌、ゴミ 捨て穴、建物	土師器、陶器、磁器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 瓦質土器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-28

平安京左京四条四坊三町跡

発行日 2007年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961